

「鏡は身につけてゐる間こそ魂も添ふであらうが、身を離れては魂は添はない。」
 「それでは何に致しませう」と、小安は聞いた。

「貴女が何時も何時もしてゐる行おこなひを奉加して貰はうかの、」
 小安は合點が行かなかつた。

「第一貴女が我意を張る事ぢや、第二は、疝癩を起すと朝寢をすること、第三は、口答へと負け惜み、第四は腹立顔を見せること、第五は不精と自墮落、この五つの行を奉加して貰ひたい。」
 小安はおかしくなつて笑つた。

「どうだ、それが奉加が出来るかの、」

「出来ますとも、」

住職は懐から奉加帳を出して、小安に奉加の箇條を記入させた。小安は笑ひながら筆を運んだ。

「いよいよ奉加したからには、取り戻すと佛の罰が當る、好いかの、」

「宜しうございます、取り戻しは致しません。」

夜になつてきも六夫婦は歸つて來た。酒に咽喉の熱つてゐるきも六は、茶が喫みたいので大きな聲をして小安を呼んだ。小安はきも六の傍へ來た。

「何をぐすぐすしてゐるんだ、早く茶でも持つて來い。」

小安は穩かな顔をして、茶を運んで來た。きも六はそれが却つて不氣味であつた。翌日になつても、小安の顔は依然として穩かであつた。きも六夫婦は合點が行かなかつた。二三日すると、きも六は小安を呼んで聞いた。

「お前は、この二三日生れ代つたやうになつたが、一體どうしたんだ。」

「檀那寺の和尚さんが奉加に來ましたから、五つの行を奉加致しました。」と云つて、小安は住職の言葉を精しく話した。

傍に聞てゐる女房の眼に涙が光つた。その日、きも六夫婦と小安の三人は、一所になつて檀那寺へ行つて、住職に禮を云つた。そして、きも六は、自分の悪行を懺悔して、その寺へと百兩の金子を喜捨した。

間もなく布屋では、掣取があつたが、きも六夫婦は、直ぐその掣に世を譲つて、隠居して安らかな一生を終つた。

村の怪談

私の郷里で女や子供を恐れさす物は、狸としばてんと云ふ怪物とであつた。

『某さんは、昨夜、狸に化されて、家へよう歸らずに、某所をぐるぐると歩いてゐた。』

『某さんは、狸に化されて、朝まで某所に坐つてゐた。』

『某さんは、某さん所へ寄つて、茶を飲まして貰つて、やつと正氣になつて歸つた。』

などと狸に化されて、朝まで墓地を歩いてゐた人の話とか、自分の家の方へ歸つてゐたと思つてゐた物が、反對に隣村の方へ行つて、其所の渡船場へ出てやつと氣が付いたと云ふやうな話は、平生の事であつた。しばてんの話も、それと一所によく聞かされた。しばてんは子供の姿をしてゐた。それは親類の許から御馳走になつて歸つてゐる、村の男の前にもちよこちよこと出て來た。

『角力を取らうか、角力を取らうか、』

村の男は、なにを生意氣なと思つたが、本氣になつて子供の相手になるのも大人氣ないので、そのまゝ行かうとすると、子供は兩手を擴げて立塞るやうにする。

『角力を取らう、角力を取らう、』

村の男は、子供を突き飛ばして驚かしてやらうと云ふ好奇心が起つて來る。

「取るか、」

村の男は、月の光に子供の顔を透し見て莞爾と笑ひながら、早速片手を突き出して、子供の胸のあたりに平手をやり、一と突きに突かうとしたが、子供は動かないで、そのはづみで自分が背後へよろける。彼は忌々しいので、兩手で子供を抱き締めて放り投げやうとする。子供はふいと身を代す。彼はそれが爲めに前にのめる。彼は忌々しくて忌々しくて仕方がない。

その男は、村の者から大石塔と云はれてゐる海岸の松原にある無縁の石碑を相手に角力を取つてゐたのであつたが、朝になつて地引網へ行く者から氣を付けられて、はじめて我に返つた。あゝる者は、怪しい子供に角力をいどまれたと云つて、荆棘の藪の中で、血だらけになつて荆棘と角力を取つてゐた。

しばてんは、初夏の頃、麥の莖が黄ろに染まる頃に好く出て、野に遊んでゐる村の少年をたぶらかした。麥の黄ろになりかけたのを、其所では麥のかさうれと云つた。その時分には、好く海岸に大きな波が立つて海が脹らんだやうに見え、沙氣を含んでべとべとするやうな風が吹いて、麥の穂の上を白い蝶が物憂さうに飛んだ。その麥のかさうれ時には、何時も暗くなるまで遊んでゐる

る少年も、陽が傾く頃から家に歸つて行つた。

しばてんと關聯して、河童の話も聞かされた。それは池や川にゐて、時折村の少年を死に導いた。

『あの子は、ゑんかうにかうもんを抜かれた。』

私の村では、河童をゑんかうと云つた。土用の丑の日に、村の農家では、胡瓜を海や川に流して、河童を祭つた。

狸は人をたぶらかすばかりでなく、又人に憑いて禍をした。私の村で人に憑く物では、狸の外に犬神と云ふ物があつた。犬神は關東のおさき狐と同じやうな物で、それは狸や狐などのやうに一時的の物でなかつた。村では犬神持ちと云はれてゐる家があつて、その家にゐる犬神は、其所の家人の心のまゝになつて、相手の者に憑いた。其所の女房が、隣家の蠶の生育の好いのを見て、それを羨ましく思ひでもすると、犬神は直ぐその蠶に憑いて、一夜の中にその生育を悪くするか、其所の何人かに憑いて、その者を病人にした。又隣家に出してゐる漬物の色合の好いを見て、

それが食たいと思ひでもすると、その犬神は直ぐ隣家へ行つて、その漬物の味を違へたり、家の人に憑いたりした。

その犬神を除くには、修験者のやうな事をやつてゐる者が来て、よりと云ふ者を立て、祈禱にかゝる。よりは病人の代りになる者で、主に女で、多くは經驗のある、何時もよりとして雇はれてゐる者であつた。そのよりは病人の傍で、祈禱者の用意して来た榊の枝に紙片をつけた幣を兩手に捧げるやうに持つて、寂寞として坐つてゐる。と、祈禱者が聲高々と祈禱をはじめ。祈禱が進んで来るに従つて、よりの幣を持つた手が顫ひ出す。それは犬神がよりに移つて来た印だ。よりは額から大粒の汗をほろ／＼落しながら幣を動かした。榊の葉がばら／＼と鳴つた。紙片が切れて飛び散つた。祈禱者はそれを見ると、祈禱を止めて睨むやうによりの女を見下す。

「お前は何んぢや、云へ、何處から来た。」

「近所から来た。」

と、よりの女が怪しい聲で苦しさに云ふ。祈禱者には直ぐ見當が付いた。それが分らない時には、

「近所とは何處ぢや、云ふて見よ。」
と云ふと、

「安右衛門からじゃ。」

などと、犬神持ちとせられてゐる家の名を云ふ。強情なのは何所から來たとも、犬神とも何とも云はない事がある。さうすると祈禱者が憤つて嚇す。

「云はないと金縛りにするぞ。」とか、

「祈り殺すぞ。」

とか云ふと、白狀する者がある。犬神と思つてゐたのが狸であつたり、死人の靈であつたりする。

「何しに來た。」

と、病人に憑いた原因を聞くと、食物が欲しかつたとか、或物が羨しかつたとか、門口を通つてゐたら某所の犬に吠えられたから、恨みも何もなかつたけれども憑いたとか、種々の事を云つた。

「それなら、早う歸れ。」

と祈禱者が命令すると、

「歸ります。歸ります。」

と云つて、幣を動かしてゐたよりの女が、急に體を動かして背後に倒れる。と、女はけろりとして起き上がる。彼はもうもとの女になつてゐる。時とするとその女は、門口にまで這つて行つて倒れる事がある。

「歸らない、怨みがあるから取り殺す。」

など、云ふ者もある。中には、

「握り飯をこしらへて、俺の家の門口まで持つて行つてくれるなら、歸る。」

と駄々をこねる物もある。病人の家ではその通りにした。漬物などを欲しがるところへは、それとなしに漬物を持つて行つた。貰つた方ではそれを知らないから、感謝してゐるが、送つた方は舌を出した。で、私の村では、思ひもかけない所から物を貰ふと、

「私の家の犬神が行つたじゃないか。」

と云つて笑つた。今はそんな事を云ふ者もすくなくなつたが、最近まで犬神持ちの家とは結婚をしなかつた。

「彼所の小母さんの眼を見ろ、光つてゐるじやないか、」

犬神持ちの家の人は、違つた光る眼を持つてゐると云はれてゐた。私の知つてゐる老婆は、神經的の光のある眼をしてゐた。

私の郷里は土佐國の海岸であつた。今はどうか知らないが、私の郷里には好く流行神様と云ふ物が出来た。昨日まで何もなかつた野原や畑の間に、急に小さな祠が出来て、それに詣參する者が赤や白の小さな幟をあけた。

「彼所の流行神様は、躰が歩き出した。」

「盲目の邊路の目が見え出した。」

など、流行神様の噂が村の人の口から口に傳へられる。その流行神様の本尊は、古い名も知れない石塔であつたり、石地藏であつたり、狸であつたりしたが、中でも多いのは狸であつた。

「あれは、某所の狸じや、」

村の人はその狸の名まで知つてゐた。狸が流行神様になるには、村の人に度々憑いた結局、俺を神として祭れば、もう人に憑かない。」

など、云ひ出して、それで祭やうになるのであつた。

何時の頃であつたか、私の村に甚内と云ふ力士があつたが、その甚内は狸に憑かれる人があると、その人の背から肩を揉んで、狸を追ひ出した。これには狸も困つたであらう、ある夜、甚内が林の下を通つてゐると、一疋の狸が出て来て、

「甚内さん、甚内さん、」

と呼んだ。甚内は巫山戯た事をする奴ぢや、一つ捕つて汁にでも焼いてやらうと思つて立ち止まつた。

「甚内さんにや叶はんから、一つもうけさして仲直りしたいが、やつてみませんか、」

「何をやる。」

「私の仲間が城下の浅井(兼豪)のお嬢さんに憑いてゐるから、二人で紀州の花岡(名醫)に化けて

行つて、仲間に退かしたら、うんと禮をくれるから、それをお前さんにあげやう。」

甚内は淺井の禮なら大した物だと思つた。

「何時行く。」

「これから行かう、私に随いてくるなら、直ぐ行ける。」

村から城下の町へは、陸路で行つても三里ばかりしかなかつた。

「どうして行く。」

と、甚内が聞くと、

「ちよつう待つておくれ、支度をする。」

狸は傍の木の葉を五六枚とつて、それを口で甜めて體に貼つたが、見る／＼それが衣服になつた。そして、木の根に這ひまつはつてゐる蔓を引きちぎつて胴に巻くと、それは帯になつた。甚内は、狸が人に化けるには、木の葉を甜つて貼ると聞いてゐるが、なるほどさうだなと感心して見てゐると、狸はもう立派な醫師になつて、藥籠さへ構へてゐた。

「この藥籠をお前さんが持つて行くが好い、お前さんは私の弟子の積りでゐるが好い。」

と、藥籠を差出すので、甚内はそれを受取つて肩にした。

「では、行かう。」

と云つて、狸の醫師はすん／＼と歩いて行く。甚内もその後から隨いて行つた。そして、暗い中を暫く行つたかと思ふと、もう城下町の家並が燈火の中に浮き出て來た。

「や、もう城下へ來たな。」

甚内はその早いのに驚いてゐると、眼の前に大きな門が見えて、狸の醫師は、その内へ這入つて行つた。甚内も續いて這入つて行くと、直ぐ大きな玄關になつた。玄關にはもう五六人の者が燈火を持つて出迎へてゐた。

「花岡先生のお出でじゃ。」

「花岡先生じゃ。」

出迎人は口々に云つて、狸の醫師の手を取るやうにして案内した。甚内は夢のやうな心地で隨いて行つた。行つてみると大きな座敷で、其所には澤山の酒肴を構へてあつた。

「可よともあれ、まアお一つ。」

出た一人は、狸の醫師に盃をさし、それから甚内にも盃をくれた。その酒の味は又とない好味であつた。酒好の甚内は知らず知らず盃の數を重ねた。

この中に狸の醫師は、診察にと云つて席を起つた。甚内は矢張り肴を喫ひ、酒を飲んでゐるが、若し狸が失販しては大變だと思つたので、ふと顔をあげて見た。と、隣の座敷にしめやかな話聲がする。それは狸の醫師の聲で、病人のお嬢さんは、其所に寝てゐるらしかつた。甚内は襖の隙から覗きたいと思つて、注意してみると、小さな穴があつた。で、其所へ片眼をやつた。髪は黒い綺麗な女の寝てゐる枕許に狸の醫師が座つてその片手の脈を取つてゐた。

甚内は狸にたぶらかされてゐた。彼は村の背後になつた山の上の、土地の人からカンカン岩と呼ばれてゐる岩の穴に眼をやつて、一心になつて覗いてゐた。

その甚内は間もなく病死した。村の人は、甚内は狸を採み出してゐるから、狸に敵を討たれて死んだと云つた。——これは私の郷里にある話である。

私の郷里には、又かう云ふ話もある。それは、某と云ふ男があつて、或夜、路を歸つてゐると

一疋の狸が木の葉をちぎつて體に貼つてゐるので、某は笑つて、

『そんな事をしたつて駄目じや、俺が好く化けれる事を知つてゐるから教へてやらう、』

と云ふと、狸は翌晩になつて、その男と約束の所へやつて來た。その男は用意してゐた袋を出して、

『この内へ這入つたら、思ふ物になれる。』

と云つた。狸が眞箇にして這入ると、その男は、袋の口をぐいとしめて、突然地の上に投げつけて殺した。

腕自慢の若侍があつた。彼は奇怪な狸の噂を聞いて、その狸を退治すると云つて、或日一人で山の中へ這入つて行つた。

と、向ふの方から振袖を着た綺麗な女がやつて來た。若侍は不思議に思ふた。草刈娘なら兎も角、かうした所へ振袖を着た綺麗な女が一人で來ると云ふのは、頗る奇怪できる。さてよ、若しかすると、あれが狸の化けたのかも分らないぞ、と、彼は横眼を使ひながら女の方に注意してゐた。

若いおどろした女にも似合はず、荆棘の上も、萱の中も構はず、ひらりと歩いて来た。さては、と、彼は思った。

女は白い、あどけない顔に莞爾と笑つて寄つて来た。若侍も莞爾と笑ひながら女の来るのを待つてゐた。

女の艶かしい顔が眼の前にあつた。若侍は抜く手も見せず、腰の刀を抜いて切りつけた。女は聲も立てずに倒れたが、それはまぎれもない女の死骸であつた。若侍は周章て出した。狸でなしに人であつたら、恐れに眼が暗んで人と狸と間違へたと云つて世間から笑はれる、もしさうであつたら、とても生きてはゐられない、と、彼は女の死骸を見詰めてゐた。

三人連れの侍らしい女が走るやうにやつて来た。若侍は當惑した。侍女らしい女は若侍の傍へ来た。

『若しや此所を、お姫様がお通りになりはしまいか、』

と、一人が云つた。若侍はさては自分の殺したのはお姫様であつたか、しまった事をしたと思つて、全身の血が一時に氷結したやうに思つた。

『や、これは、お姫様、何物がこんな姿に……』

と、一人の侍女は倒れるやうに死骸に取り付いた。他の侍女も泣き叫んで死骸に取り付いた。

若侍は忘然として立つてゐた。腰女の一人は若侍の血刀を持つた手をぐつと掴んだ。

『この悪人、そちは何の怨みあつて、お姫様をかうした眼に逢はせたのじゃ、』

若侍は血刀を手から落とした。と、足音がして山狩姿をした武士が、五六人の侍者を従へてやつて来た。

『や、殿様のおでましじゃ、』

若侍の片手を掴んでゐた侍女の一人が云つた。山狩姿の武士は侍女の聲を聞きつけると、その方へ寄つて来た。これは國主であつた。

『何事じゃ、』と、國主は聲をかけた。

『この者がお姫様を手にかけてましてございます。』

『なに、姫を手にかけた。』

と云つて、死骸をちつと見てから、その眼を怒らした。若侍は腰を抜かしたやうに坐つて、頭

を土の上にすりつけた。

「につくい奴、何故あつて姫を手にかけた。」

「恐れ入りました。」

「何故あつて姫を手にかけたのじゃ、早く云へ。」

と、國主は涙聲になつてゐる。

「諸人の害をなす狸を退治致さうと思ひまして。」

「たはけ者、狸と姫と區別が出来ないか、武士の風上にも置けない奴、せいばいして姫の仇を取つてやる。」

國主は侍者の一人に持たしてある刀を取つて、それをすらりと抜いた。若侍はせめて殿様の手討にでもなれば、その罪がつくなへると思つて、腹を据えてしまつた。

「暫く、暫く、殿、暫く。」

と云ふ聲がする。何人が手討を止める容子がある。

「殿、如何なる大罪を犯したかは存じませんが、愚僧に免じて、どうか生命だけは……………」

と云ふのは、國主の信仰の深い僧正であるらしい。

「姫を手にかけたる大罪人なれば、免すまじき奴なれども、貴僧に免じて許しつかはず。」

「そは有難き仕合せに存じます。然らば、この者は今日より愚僧の法弟と致して、姫の後世を弔はせます。」

僧は若侍の傍へ寄つて來た。

「我が君の有難きお情けによつて、一命は愚僧が貰ひうけた。今日から出家して、愚僧の法弟になるが好い。」

と云つた。若侍は生命は既にあるものと思つてゐた所である。それが死なずに濟なむやうになるのであるから、非常に喜んだ。彼は片手に小刀を抜き、片手に鬘を掴んで、ブツリと根元から切つてしまつた。

若侍は通り掛つた村の人に聲を掛られて驚いた。彼は山の中の草の上に坐つて、頭髮を切り、それを傍に置いて合掌してゐた——これは土佐で有名な狸の話である。

本書は、著者の長年の経験と研究に基づき、社会運動の歴史と現状を詳しく解説している。社会運動の定義、その種類、そして社会運動が社会に与える影響について、豊富な事例を挙げながら論じている。また、社会運動の発展を促すための条件や、社会運動家としての資質についても詳しく論じている。本書は、社会運動に関心のある人々にとって、非常に有益な読み物である。

著 者

社会運動に携はつた人々

本書は、著者の長年の経験と研究に基づき、社会運動の歴史と現状を詳しく解説している。社会運動の定義、その種類、そして社会運動が社会に与える影響について、豊富な事例を挙げながら論じている。また、社会運動の発展を促すための条件や、社会運動家としての資質についても詳しく論じている。本書は、社会運動に関心のある人々にとって、非常に有益な読み物である。

序 言

年少十三、「自由は勝利よ、官権亡滅」と云ふことを口にして、明治二十五年の選挙大干渉の日、鋤の柄の棍棒を手にして、村の自由黨員の許を見廻はつた私は、青年結社の夜學會では、服部某譯のルーソーの民約論や、ミルの代議政體論、自由の理、ギゾーの文明史、佛蘭西革命史などの話を聞かされて、自由主義の空氣の中に浸つてゐたと云ふ所から、政治運動に興味を持つて居り、上京してからも、同郷の先輩として、奥宮健之、田岡嶺雲の諸氏に接近したものゝ、閑雲野鶴、和平を愛する性情の爲めに、社會主義の何物たるかを知らないで過したにも係らず、當時の印象を基礎とし、獨立評論などを参考して、社會運動にたづさはつた人々の話を書かうとするのだから、その正鵠を得ないのはもとよりである。――

樽 井 藤 吉

板垣によつて提唱せられた自由主義が、日本國民を政治的に覺醒して、全國に政治運動の勃興

した際、九州の一角、肥前の島原に『東洋社會黨』と云ふのが組織せられた。それは明治十五年五月二十九日、第一回の會合を同地の江東寺と云ふのに催したが、來り會する者數百であつた。その綱領と云ふ物を見ると、

第一條 我黨は道徳を以て言行の規準とす

第二條 我黨は平等を主義とす

第三條 我黨は社會公衆の最大福利を以て目的とす

と云つてゐる。當時はアレキサンダー二世を斃した兇暴な虛無黨の噂が耳に新なる時で、その虛無黨は社會黨の一流派であるとしてゐる政府では、直にそれを禁止した爲めに、その活動を見るに及ばなかつたが、史家は之を日本に於ける社會運動の先驅としてゐる。

同黨は樽井藤吉の思想から萌芽したものであつた。それに社會黨と云ふ名目を用ゐたのは、樽井が長崎で洋行歸りの客から、貴下の思想は、歐洲の社會主義と云ふ物に暗合してゐると云はれたから、はじめてその名を冠したと云はれてゐる。樽井は大和の人で、當時三十三四歳であつた。もと材木商として身を起したものであつたが、ある動機から社會問題を考へるやうになつた。山

路愛山はそれを説明して、「氏は一家を經營するは天下を經營するに如かず、一身を以て善を爲すは、國家をして善を爲さしむるに如かず、個人を中心として別々に貨財を運用するは、國家をして貨財を集中し運用せしむるに如かずとし、所謂社會政策の如きものを案出し」と云ひ、又、樽井の思想は、一國を擧げて家人父子の如くならしめんとすると云ふ漢學思想から案出するは容易であるが、『而も樽井氏の思想は、全く獨創にして書齋の臭味なきに似たり。されば是を日本に於ける自發の社會主義或は社會政策と云ふも亦可なり』と云つてゐるが、獨創自發と云ふ事は、どうであらう。マルクス、エンゲルスが共產黨の宣言を合作して、所謂ゆる科學的社會主義の主張を公にしたのは弘化四年である。維新の前後、各地に設立した英語學校の教科書にと船載した物の中に、それに類似の書籍の交つてゐなかつたと云ふことを、何人か斷言する事が出来やう。

創造模倣の考證は別として、とにかく、彼は一種の天才であつた。彼は岩倉公に面會して己の抱いてゐる新説を進めた事もある。又、その理想を實現せんが爲めに、植民に適する無人島を尋ねて、朝鮮の多島海を彷徨したこともある。そして最後に世間から注目せられた事は、明治二十年の選舉干渉に際して、大和の土豪土倉庄三郎の地盤から代議士に當選した事である。その時、

彼は雑誌太陽に、「國有鐵道論」と云ふのを掲げて、鐵道は國家の事業でなければならぬと云ふ事を論じたが、何人も彼の説に耳を傾ける者がなく、一生涯に贏ち得たのは僅に理想家と云ふ名に過ぎなかつた。

奥宮健之

明治四十二三年頃、奥宮は小石川水道端町の小さな家に住んでゐた。其所には離屋になつた小さな書齋があつて、縁先に五六羽の金絲雀を飼つた籠が据ゑてあつた。奥宮はその書齋で萬國社會黨運動史を譯してゐた事があつた。安政三年十一月生れの、その時五十二三歳になる、肥滿つて脊の高い體をゆつたりと構へて坐つてゐるが、額の寬い、頬の肉付の豐な顔には、心持ち臍のさがつた茶色の眼が、やはらかな光を放つてゐた。右か左かの頸元には瘰癧の痕らしい物もあつた。奥宮は後に遊谷の方へ引越して晩年を其所で送つた。

奥宮は高知縣土佐郡布師田村の人で、その父造齋は佐藤一齋の高弟で土佐第一流の陽明學者であつた。土佐の立志社では尾崎行雄、犬養毅、大石正己、元田肇、栗田亮一等と机を並べてゐた。

明治十四年には、加藤高明、小川鮎吉、江南哲夫の三人と三菱會社へ入社したが、その年の九月、開拓使官有物拂下事件が起り、國會開設の詔勅が出て、それに續いて自由黨が組織せられたので、彼は三菱を退いてそれに加盟した。

奥宮は學問識見が儕輩を抜いてゐた。彼は自黨中の少壯論客として重ぜられた。十五年には馬場辰猪、大石正己、西村玄道、佐伯剛平等と東京府下に、「國友會」と云ふのを組織して、盛んに民權思想の鼓吹に力めた。政府では民權運動の日に熾烈に赴くのを恐れて、集會條例を設けて志士を壓迫した。演説の禁止、禁足、拘引、禁錮、退去の災厄に罹る者が陸續として相踵いだ。奥宮も淺草井生村樓の演説で府下に於ける演説權を奪はれ、講談師になつて講談に托して政府攻撃をやつた爲めに、是れ亦一箇月半の輕禁錮に處せられた。奥宮の讀書が社會主義の書籍にまで及んでゐたか否かは分らないが、當時の思想は社會主義に傾いてゐたと思はれる所がある。

その時、東京市内に馬車鐵道が敷設になつて、それが爲めに業を失つた車夫の一團が會社を怨望してゐた。奥宮は駿河臺紅梅町にゐた『チビ龜』本名を三浦龜吉と云ふ車夫の取締と相談して、車夫を神田の明神山へ集めた。車夫の数は三百餘名あつた。奥宮は腹掛の上に紋付羽織を着、空

樽の上にあがつて、鐵道馬車廢止運動に關する演説をやり、その會名を「車界黨」と云ふ事にして、いよいよ運動に取りかゝらうにしてゐる内に、政府の羅織する所となつて、四箇月餘を石川島の監獄に送る事となり、車界黨の運動もその儘になつてしまつた。

奥宮は後名古屋に行つて、政府顛覆の戯曲を描いた爲めに、十八年一月に捕縛せられ、名古屋監獄から小菅集治監、宮城監獄、最後に北海道の樺戸監獄に服役してゐる内に、二十九年七月になつて特赦せられたが、十年の監獄生活中に、世間は一變してゐた。鏘々たる當年の民權家も手の出しやうがなく、僅に明治三十九年の電車値上問題の際、東京府下で労働黨をつくりかけてゐたが、これも何時の間にか立ち消えて、越へて四十五年一月二十四日、落寞たるその一生を終つた。

德 富 蘇 峯

德富蘇峯を社會運動者の中に入れる事は、今日から見れば異様にも思はれるが、併し、明治二十年二月を以て第一號を發刊した『國民の友』は、當時に於ける唯一の社會主義的思想の宣傳者

であつた。伊藤博文が獨逸から歸つて政府に入ると、極端な歐風模倣を採用して、從來の平民的簡易主義に對する貴族的繁縟主義を、民主的自治思想に對する君主的干渉主義を齎した爲めに、二個の反動が起つた。一つは純然たる保守的反動で、これは二十一年四月になつて『日本人』を發刊した政教社一派の唱へた國粹主義で、他の一つが、即ち徳富の率ゐた民友社一派の唱へた精神的基督教主義であつた。

徳富蘇峯は、文久三年肥後國葦北郡水俣村に生れた。横井小楠の高弟徳富淇水の嫡男である。彼は後に平民主義を捨て、帝國主義の宣傳に遷り、一たびは文部省勅任參事官に任ぜられ、四十四年には貴族院議員の勅選の榮を贏ち得たものゝ、前後二回民衆の怒を買つて、自己所有の國民新聞社を襲撃せられたのは氣毒にも思はれる。當年の彼は、雑誌に據つて社會主義を傳播するばかりでなく、カーペンターの『文明の弊及び救済策』や、『現時之社會主義』などを發行した。西川光二郎は『現時之社會主義』に據つて、はじめて社會主義の何物たるかを知つたと云はれてゐる。

民友社一派の者で、社會運動に従事した者は、山路愛山と國木田獨歩であつた。山路は明治三十九年の電車値上問題の際、國家社會黨と云ふ物を組織して、値上反對を叫んでゐたが、何時の

間にか屏息し、國木田は矢野文雄の股肱となつて、矢野が『新社會』を刊行して、社會問題講究會を起すと、その幹事になつて働いたが、その會もさしたる光を見せずに終つてしまつた。

中江兆民

中江兆民は自由主義者で社會主義者でなかつた。山路愛山の云ふ所に據ると、彼は人に向つても『余は自由主義の日本に行はれんが爲めに些か微力を盡しつゝあり、社會主義の如きは自由主義の後に來るべき問題なり、余は此故に未だ社會主義に就て學ぶ所なし』と云つてゐたらしいが、その周圍には共產主義の氛圍氣があつた。

中江は高知市新町の人で、弘化四年の生れであつた。十九歳の時、藩の留學生となつて長崎で佛蘭西語を學び、明治四年二十五歳で佛蘭西に行つた。佛蘭西ではナポレオン三世の失敗した際で、ガムベツタ、チエールなど云ふ共和黨の名士が、鼎沸した政界に立つてゐた。西園寺公望、光妙寺三郎などと彼の地で交を訂した。そして、明治七年になつて歸朝して元老院書記官となつたが、幹事陸奥宗光と合はないので、直ぐ辭職して在野の人となり、番町に佛學塾を起して、政治法律

歴史哲學を教へ、「政理叢談」を發刊し、ルソーの民約論などを翻譯した。自由主義の思想の量^{ちか}は、この佛蘭西學者に負ふ所がすくなくなかつた。

その中に西園寺公望の『東洋自由新聞』が起り、自由黨が起り、板垣の『自由新聞』が起つた。中江は皆これに與つて、熾んに自由平等の説を唱へ、時の專擅政府を攻撃した。そして、明治二十年、井上馨が條約改正に失敗して、全國の志士が名を三大事件の建白に托し、爆彈を抱いて東京に集まつて來たので、政府では狼狽して、保安條例を發布して、志士を皇城以外三里の地に逐ふた。中江も逐客の一人であつた。其所で彼は大阪に行つて、栗原亮一等と東雲新聞を起して、自らそれに主筆となつてゐたが、二十二年の春、憲法發布があつて、保安條例の退去命令が解除せられ、政治運動の中心が又東京に移り、後藤象二郎がその機に乗じて大同團結を唱へ、雜誌『政論』を發行する事になると、中江も呼ばれて上京したが、後藤が大同團結を踏臺にして入閣した爲めに、大同團結は解體し、在野黨は潰裂した。彼は自由黨の再興を策して、自由新聞、立憲自由新聞に主筆となつてゐた。

やがて國會が開設せられた。彼は大阪の第四區から選舉せられて代議士となつたが、在野各派

の間を往來して、民黨の陣容を整へ、政府に肉薄して、政府提出の豫算案から八百萬圓を削減しようとする瀬戸際になつて、自由黨中の土佐派が裏切した爲めに、民黨は潰走した。中江は『アルコール中毒の爲め、評決の數に加はり兼ね候に付辭職仕候』と云ふ辭表を呈出して、議員を罷め、『經論雜誌』を起し、『民權新聞』を發行して、政府及び吏黨を攻撃すると共に、犬猿の間にあつた自由黨と改進黨との間を融和させたので、政府では大に恐れをなした。その結果、大隈の樞密官辭任となり、第二議會の解散となり、明治二十五年の選舉大干渉となつた。

選舉大干渉の年には、中江は北門新報に聘せられて小樽に行つてゐたが、遂に筆を投じて實業界の人となり、札幌に紙店を開き、それから毛武鐵道、河越鐵道、常野鐵道、京都バナラマ、中央清潔會社と云ふやうに經營したが、皆失敗に終つた。

明治三十一年に松隈内閣が倒れて、伊藤内閣が成立すると、自由黨と憲政黨とは、多年の主義主張を一擲して、多年の政敵たる伊藤公を總裁に仰いで政友會を組織した。常野鐵道經營中の中江は赫怒した。彼は政界を掃清する爲めに同志を糾合して、『國民黨』と云ふのを組織して、機關雜誌『百零一』を發行した。三十三年には毎夕新聞の主筆となり、國民同盟會が起ると、それが爲

めに奔走して、醜怪なる政友會から破壊し、順を追ふて政界を革新しようとしたが、その内に病氣となつた。

病氣は食道癌であつた。有名な『一年有半』は、その病間になつた物である。死亡したのは翌三十四年十二月十三日、年は五十五歳であつた。この畏敬すべき思想家の門下から、小島龍太郎、酒井雄三郎、幸徳秋水の社會主義者が出た。

小島は佛蘭西學者で西園寺侯の友人であつた。西園寺が佛蘭西から歸朝した際、彼の地から持つて來た社會主義及び社會問題の書を、小島に與へたので、小島はそれによつて社會主義に關する智識を得たと云ふ者がある。もと農商務省の書記官をやり、轉じて衆議院の書記官となつた事もあるが、後には赤坂に『花月』と云ふ待合を出した。

酒井は佛蘭西に遊學してゐた者で、歐洲社會黨の運動を折々『國民之友』に通信した。この酒井と小島とは、明治三十年に起つた『社會問題研究會』の有志として、酒井はサン・シモンをはじめ、佛國社會主義者の名を口にし、小島はラザールの社會主義とマルクスの社會主義との相違などを話して聞かした。

大井憲太郎

大井憲太郎に私がはじめて逢つたのは、奥宮健之の水道端の家であつた。下顎の短い、蛙のやうな口元をした老人で、鋭く光る眼に人を威壓する所があつた。なんでも梅雨の季節で、暑いひせむせする日であつたに係はらず、大井は白い毛織の股引を履いてゐるのが私の印象に残つてゐる。煙草を黄金の煙管で喫んでゐた。

大井は大阪事件で世間的に名がある。それは明治十八年、大井憲太郎、磯山清兵衛、小林樟雄などが主動者となつて、朝鮮政府を顛覆し、金玉均、朴泳孝等の獨立黨に攻權を與へて、朝鮮から清國の勢力を一掃すると共に、一方日清間の葛藤を生起して、政府をして國民輿論の渦巻に投じて自滅せしめ、一舉にして自由主義を行ふと云ふのにあつたが、事破れて多數の同志と獄に下つた事件であつた。

大井は豊前國宇佐郡馬城山下に往む豪家に生れた者で、本姓は高並であつたが、大阪に出て大井ト新と義兄弟となつた爲めに、大井姓に更めたのであつた。少年の時長崎で蘭學を修めた。幕

府の大砲隊に加はり、大阪舎密局の助手となり、又陸軍造兵司の譯官ともなつたが、皆直ぐ罷められた。板垣後藤等が民選議院設立の運動をはじめると、それに聲援した。加藤弘之が議院尙早説を發表すると、馬城臺二郎の名で之を反駁したが、義理極めて明快であつた爲めに世間から注目せられた。明治八年になつて、元老院の少書記に任ぜられたが、間もなく辭任して代言人となり、傍ら自由主義の鼓吹に勤め、隠然關左自由黨の首領を以て目せられてゐた。所で大阪事件などがあつた爲めに、従來の同志との間に思想感情の疎隔を來たし、従つて明治二十四年に起つた自由黨に飽き足りないで、別に『東洋自由黨』を組織したが、それは労働者保護を標榜した物であつた。そしてその實行機關として、『日本労働協會』『普通選舉期成同盟會』が創立せられた。この運動は根柢のある社會主義論の原理に立脚した運動ではなかつたが、労働問題を標榜して立つた政黨の嚆矢となつた。

大井は急進的革命家の色彩を帯びた煽動政治家であつた。政府では大井を一敵國として、あらゆる迫害を加へた。それが爲めに大井は數回代議士の候補に立つたが、一回も當選する事が出来なかつた。爾後大井は蹉躓に蹉躓を重ねて、植民事業などにも手を出したが皆失敗に終つた。そ

して、明治三十二年六月になつて、大阪で『大日本労働協會』と云ふのを起して、労働問題を提けて立ち、『大阪週報』と云ふ機關雜誌も發行して、次第に成績も好くなつたので、東京方面にもその手を延ばす事にして、三十四年上京したが、その思想に於て東京方面の労働運動に非常に優れてゐた。萬朝報の記者久津見蔵村が參謀の一人となつて、大に奔走したにも係はらず、幸徳秋水などから、資本家の爲めに調停の下地を作るものであるなどと嘲けられ、その運動も挫折してしまつた。

社會問題研究會の人々

思想の遊戯に過ぎなかつた社會主義運動は、日清戦争後、血の浸み出た生きた社會主義運動となつた。明治三十年になつて『社會問題研究會』と云ふのが起つた。會員名簿には二百名の紳士の名があつて、月一回新橋新肴町の開化亭に集會を開いたが、毎會の出席者は三十名ばかりであつた。品川彌次郎、田口卯吉、和田垣謙三、松村介石、陸實、三宅雄次郎などは、出席はしなかつたが、名簿の中にその名があつた。安岡雄吉、元田作之進、尺秀三郎、根本正、人見一太郎、

田島錦治、佐治實然、石川安次郎、中井喜太郎、岩本善治、長田偶得、高橋五郎、宮崎八百吉なども出席した。幹事は中村太八郎、樽井藤吉、西村玄道の三人であつた。會員中で社會主義に就いて相應な智識を持つてゐる者は、城泉太郎、吉田義靜、小島龍太郎、酒井雄三郎、佐久間貞一、片山潜の數人であつた。

その中で、城泉太郎は、中村敬宇の同人社に教師をしてゐた事もあり、地租輕減論の起つた頃には、土地國有論を唱へたと云ふ歴史を持つてゐた。彼は中江兆民の友人で、築地在住の宣教師ガルスト等とも親交があつた。

吉田義靜は熊本の人であつた。島田重禮の塾長を勤めてゐた事もある。藩主細川護久に従つて佛蘭西に行き、八年間彼の地にあつて社會主義の書なども可成り讀んでゐた。歸朝後は外國語學校及び高等學校で佛語を教へてゐた。

佐久間貞一は、秀英舎の舎主であつた。幕臣の家に生れて俠氣に富んでゐた。肺病で死期がはかられないのにも係はらず、職工の状態改良に意を注いで奔走してゐた。明治二十四年、陸奥宗光が職工條例制定の可否を全國の商業會議所に諮ふた時、商業會議所では何人も眞面目にその問

題を考へる者はなかつたが、彼一人は熱心にその必要を論じたと云はれてゐる。

社會問題研究會は、單に研究的の會合で、巷へ出るには至らなかつたが、一世の人心を刺激した。『協同親和會』『勞働者組合期成同盟會』『普通選舉期成同盟會』など云ふ諸會が其氛圍氣の中に生れた。協同親和會は、山口彈正、一木齋太郎が指揮し、樽井藤吉、稻垣示が背後に控へてゐた。その會員には壯士が多かつた。それは足尾の鑛毒問題で風雲を巻き起したが、會員中に古河の賄賂を受けたと云ふ忌はしき疑惑を生じて、それが爲めに事業も中途で破れた。

勞働者組合期成同盟會は、高野房太郎と片山潜の經營する所で、佐久間貞一の援助の下に成立したものである。高野は高等工業學校の前身の職業學校の役員であつた。高野の奔走で造幣局と鐵道局との勞働者で職工組合が成立した。高野はその上に勞働者の爲めに共同販賣店を設け、又勞働者救濟の爲めに共同の基金を作る必要から、職工義友會を組織したが、不節制な勞働者の態度は高野の豫期に反するばかりで、遂に失敗に終つてしまつた。

普通選舉期成同盟會は、河野廣中、樽井藤吉、稻垣示、新井章吾、中村太八郎、會澤寧堅、石川安次郎などが主なる會員であつた。

片山潜

マスタートオヴァーツの學位を有する片山潜は、今、亞米利加で厨夫を職業にして労働をやる傍ら主義の雑誌を出してゐる。生れは美作で、もと矢張り亞米利加で苦學をした者である。従つて思想は堅實で忍耐力に富んでゐる。社會問題研究會成立の前年あたり歸朝して、都市改良問題を唱へ、その一方で労働問題に携はつてゐた。彼はその主義傾向から、はじめは政治的の運動を避けてゐたが、何時の間にか普通選舉同盟會にも加はるやうになつた。

片山はその頃から週刊平民新聞の起る頃まで、安部磯雄と肩を並べて日本社會主義者の巨頭とせられてゐた。社會問題研究會は、一年餘で幹事の中村太八郎が郷里の選舉に關して獄に下り、西村玄道が病死し、樽井藤吉が歸國した爲めに、自づから消滅の姿となつてゐたのを、三十二年の春になつて、それを換骨脱胎して、『社會主義研究會』と云ふのにした。會員は三十人ばかり、芝三田四國町のユニテリアン教會堂を借りて、其所を集會所に當てた。片山はじめ佐治實然、中村太八郎、幸徳秋水などは、舊會員の踏み止まつた者で、新に加はつた者では、安部磯雄、村井知至、豊

崎善之助、杉村廣太郎、川上清、木下尙江などがあつた。安部村井の二人は、當時ユニテリアンの説教者と云ふ縁故から加入した者である。

其所で社會主義研究會は、安部を會長、川上を幹事、村井を書記と云ふ事にして、集會を續けてゐたが、一年の後には、事務所を片山の家へ移して、會長は安部をその儘にし、幹事には片山が代つて、卷に出る用意をはじめた。

社會問題研究會の起つた頃から、社會問題は實際的になつて、其所此所で労働者の小同盟罷工が起つてゐたが、その年、即ち三十三年の春になつて、二六新報社の主催で向島で催ふした労働者懇親會で、群衆と警官との間に紛擾が生じ、木の端のやうに思はてゐた労働者の力と云ふ物が認められるやうになつた。これは普通選舉期成同盟會の書記で二六新聞の記者になつてゐた小野瀬不二人と、片山とがやつた仕事であつた。西川光二郎はその當時片山の周圍に集まつて來た書生の一人であつた。

三十四年の五月、社會主義研究會は勢に乗じて『社會民主黨組織』の届出をした。署名者は安部磯雄、片山潜、木下尙江、川上清、幸徳秋水、西川光二郎の六人であつたが、それは組織發表と

共に禁止せられた。

社会主義研究会は『社会主義協會』と名を更へて、屈せず主義の傳道に力めた。矢張り片山の家が事務所であつた。安部は他に業務を持つてゐたから、實際の會務は殆んど片山が背負つてゐた。片山の傍で援ける者は、西川で、幸徳、川上、木下などは、外から之を援けた。堺利彦と斯波貞吉とが、その時、前後して入會した。

堺も斯波も萬朝報の記者であつた。其所で幸徳、川上の二人を合はすと萬朝報の記者が四人となつた。萬朝報が社会主義の鼓吹に全力をあげる觀のあつたのも不思議でなかつた。萬朝報の他に、社会問題労働問題を絶叫したのは例の二六新聞であつた。社会主義の光焰は天に冲した。大井憲太郎の『日本労働協會』板垣退助の『社会改良會』矢野文雄の『社会問題講究會』などがそれに連れて起つた。

やがて明治三十六年が來た。大阪で内國勸業博覽會が開設せられた。社会主義協會では大阪に大會を開く事にして、安部、片山、木下の三人が出席した。その前後、片山、西川、松崎源吉の三人が九州の遊説をやつた事があつたが、収入が旅費に足りなかつた。西川と松崎とは、その損

失を片山に負擔させやうとしたが、片山はそれを知せず三人で等分に分擔する事にした。これが爲めに、西川は片山から離れて二六新聞へ入社した。片山の失脚する日がやがて來た。

安部 磯 雄

朝に合して夕に離れ、離合集散常ならざるは黨人の常態だ。安部磯雄もその例に漏れなかつた。安部が社会主義協會の會長となつた時は、村井知至と共に洋行歸りの新智識として持ちあげられ、堺の如きも『將來社会黨が有力な政黨となるの日には、その首領となる者は必らず安部氏だ』と人にも話してゐた。

實際安部は、頭腦が透明で、聽者を酔はしめる辯舌と、人を動かす文章があり、それに物を包容する襟度もあつた。彼が人望の中心になるのは當然の事であつたが、その態度が學究的であり又基督教の教育を受けた紳士であるが爲めに、實行の勇氣に缺ける所があつて、血氣に燃える青年に飽き足らなく思はれて來た。そして、平民社内、堺と延岡女史、西川と松岡未亡人、この二組の者が自由婚姻をした時、『社会黨の首領が私通をしてはいかん』などと批評したが爲めに、

遂に同主義者から雑誌『火鞭』の誌上で人身攻撃をせられるやうになつて、すっかりその人望も無くなつた。安部は福岡の産である。

堺 利 彦

嘗て同志と共に、片山潜を社会主義協會より追ふた堺利彦は、今度『賣文社』から部下の爲めに追はれた。已に出た者は己に歸るとも云はふか。私が堺を知つたのは、數年前、馬場孤蝶が代議士の候補者になつた時、社会黨で推薦廣告を出したから、一杯機嫌でわざこみに行つてからだ。包容力あり機略あつて、人に長たる資質を供へてゐる。豊前小倉の産で、第一高等學校の出身である。少年の日、白河鯉洋等と小倉三才子と云はれた。大阪で學校の教師をした事があるが、野口男三郎がその時の生徒であつたと山口狐劍が話してゐた。新聞記者として、はじめに『福岡日々』に入社し、それから萬朝報に入社したものだ。

赤旗事件後は、賣文社を經營して、その傍ら雑誌『へちまの花』を出してゐたが、それを『新社會』と改題して、次第に社会主義の色彩を強めた。そして最近では、山川均と雑誌『社会主義

研究』を出し、主義に關する著書をする傍、貝塚遊六の名で各雑誌に隨筆を書いてゐる。堺は將來の社会黨の首領であらう。

西 川 光 二 郎

西川光二郎は、社会主義を斷念したのか、それとも踏晦して機を見てゐるのか分らないが、今は健康法だとか斷食法だとか云ふやうな著書をやつて、社会主義に對しては狐の落ちたやうな風があるか、當年の同志の中でも、西川程激烈な男はなかつた。

淡路の人で、早稻田専門學校を出てゐる。もと内村鑑三の『東京獨立雜誌』の編輯に従事してゐたが、その雑誌が廢刊になると、國光社の編輯員櫻井一義の助手となり、それから、普通選舉期成同盟會に入り、片山を知るに及んで社会主義研究會の人となつた。不撓不屈の精神に富んだ男で、頭腦は粗大であつたが、能辯で煽動家たるに適してゐた。

彼は片山と離れて二六新聞に入社する間もなく、『平民新聞』が發刊になつたので、社会主義協會の幹部を代表して編輯局裏の人となつたが、同社は滿二年で潰滅し、思想感情に溝渠の出來合

つた同志は、思ひ思ひの旗幟を立てて分裂した。彼は山口孤劍等と雑誌「光」を出して、マルクス派の社會主義の運動を続けやうとした。

明治三十九年二月、西川、幸徳、片山の他に加藤時次郎、田添鐵次等が「日本社會黨」を組織した。當時「東京市街鐵道會社」「東京鐵道會社」「東京電氣鐵道會社」の三會社が合併して、三錢均一の電車賃を四錢均一にしようとした。西川は田川大吉郎、木下尙江、山口孤劍、石川三四郎をはじめ、國家社會黨の山路愛山等と合同して、値上反對の市民大會を開き、二回目の大會の時、市會に押しかけて騷擾したり、電車に投石した爲めに兇徒嘯集罪で拘引せられた。

四十年二月、平民社が再興になつて「日刊平民新聞」が發刊せられた。その月、足尾銅山に暴動が起つて、南助松などの同志が捕縛せられた時、西川も同地へ應援に行つて未決へ送られてゐたが、歸京してみると新聞社はもう歿落してゐた。その時、外遊してゐた片山潛が歸り合せてゐたので、二人で舊情を温めて「社會新聞」と云ふのを出してゐたが、間もなく兇徒嘯集罪の裁判が確定して入獄した。

木下尙江

木下尙江は、今、市外瀧ノ川に道場を新築して、靜座法を教授してゐる。その筋ではあゝして軍用金をこしらへて、又社會運動をはじめではないか、と注意してゐるとも聞いた。

その前には三河島村に行ひますして、三河島の聖者と云はれてゐた。彼は信州の人で、早稻田専門學校の出身である。安部と共にトルストイ流の基督教徒で、唯物論は彼の厭ふ所であつた。それは彼の宗教的創作が雄辯に語つてゐる。

松本道別

松本道別は社會主義者ではないが、その行動の跡を見ると、純然たる社會革命家の風格を供へてゐるから、この中に加へる事にした。

明治三十九年三月十八日、社會黨の主催した電車値上反對の第三回目の市民大會が上野で開かれる事になつてゐて、その間際になつて禁止せられた。第二回の騷擾に西川光二郎、山口孤劍な

どの拘引者を出した社会黨では、押して開會をしようとする者はなかつた。中にも電車が値上になれば線路の上に坐つて動かないなどと大言してゐた國家社会黨の徒は、一番に屏息したものだ。その日は日曜の上に、風が暖であつたから、大會は禁止になつても、散歩かたがた集まつた群衆が、正午過になると上野の山を埋むる程に見えた。警察では騎馬巡查まじりに五百名の正服巡查を出して、その群衆を解散させやうとした。

その時、白絨しろじやうのトルコ帽を冠り、弓の折れに贋がはした朱塗重藤の杖を持つた小柄な男が、五六人の壯士を伴れて、動物園脇の坂を登つて来て、上野署長の乗馬が暴れ出した時、商品陳列館の前の旗竿に一旗の旗をあげて示威運動の宣言をした。「皇室中心社会主義大日本青年義團」の文字がその旗にあつた。その男が松本道別であつた。

松本はその群衆を率ゐて屏風坂をおり、下谷警察の前を通り過ぎて、元佐久間町一番地先にかゝつた所で、待ち構へてゐた警官の一隊が現れて、松本始め數十名の者を檢束して示威運動を静めたが、それが爲めに内務省を反省させた。その上各區會議員も大反對をしたので、内務省では之を却下した。之を聞いて市民が安心してゐると、東京市街鐵道會社、東京鐵道會社、東京電氣

鐵道會社の三會社では、又内務省に運動して、何時の間にか認可を得、九月十一日には三會社が總會を開いて合併すると共に、四錢均一を實施すると云ふ事が分つて來た。

それは八月一日であつた。松本は欺かれたのを怒つて、反對運動に著手した。そして、九月五日には日比谷公園で市民大會を催し、その群衆を率ゐて銀座から須田町へと行つた。群衆は刻一刻に増して、形勢が不穩になつて來た。松本は群衆を上野へ連れて行つて解散しようとしたが、群衆は彼を強擁して小川町の方へ曲り、それから内務省の前へと行つた。小川町から電車への暴行がはじまつた。内務省へ亂入しようとした者は、憲兵司令部から憲兵が來て追ひ拂はれた。

松本はやつとその群衆を纏め、三菱ヶ原へ引き揚げて解散したが、群衆は去らなかつた。そして夜になるのを待つて、電車の襲撃をはじめた。その暴行は三晩に跨つた。松本はそれが爲めに兇徒嘯集罪に問はれて、二年六ヶ月を小菅の獄に送り、四十三年十月になつて出獄した。

その松本は、今、小石川林町に神人生活をしてゐる。彼の體は火も焼く事が出来なければ、自身も斬る事が出来ない。病人を見ると、この白い大きな手を觸れて、ヤツと云ふ氣合をかける。と病人はけろりとなる。私はこんな事は信じない男だが、家内や子供の體に生理的の變化を起させ

る奇怪な術を眼の前に見て考へさせられる事がある。

山口孤劍

平民社時代に社會主義に投じた書生の中で、山口孤劍、白柳秀湖、松岡荒村の三人は、頭角を抜いてゐた。

山口は馬關の人である。十五六歳の時大町桂月の玄關に置いて貰ふ積りで、出京したと云ふ逸話を持つてゐる。神田錦町にあつた松本君平の『東京政治學校』で學んだもので、石川安次郎の半山が、その時、その學校の幹事をしてゐたといふ事だ。

電車事件の際には、京都の河上肇から、『これから、社會主義が國家主義に代る、足下は宜しく社會主義の吉田松蔭を以て任すべし』と云ふやうな煽動的な手紙を貰つた。河上がさうした手紙を山口に送つたのも、彼が年少者で、いつほん氣な所を見てからの事であらう。彼はその時二十四歳であつた。

山口は兇徒嘯集罪の裁判中、新聞條令違反などが出来て来て、四十年七月になつて、やつと保釋

を許された。同志の者は、その歡迎演説會を神田の錦輝館で開いた。その當時反對の立場にゐた一派の者が、十人位一團となつて赤旗を持つて會場へやつて來たが、その歸りに神田警察の前まで行くと、警官が出て来て、その赤旗を奪はうとした。一同はそれを奪はれまいと警官と争つた爲めに、皆拘引せられた。赤旗の通つた跡を歩いて錦輝館から歸つてゐた堺利彦も、同じやうに捕へられて獄裏の人となつた。

それが爲めに山口の保釋は、忽ち取り消されて未決へ送り返され、裁判確定後は、一年有半を千葉の監獄で送つた。

平民社の人々

明治三十六年、日露戦役の前になつて、萬朝報の編輯局では、開戦非戦の兩派が争つて、その結果、非論派の幸徳と堺利彦の二人が退社した。萬朝で机を並べてゐた同志に、川上清、斯波貞吉の二人があつたが、川上はその時亞米利加に行つて居り、斯波は主義の上から矢張り萬朝に止まつて動かなかつた。

幸徳と堺とは、雑誌か新聞かを起す必要が出来た。其所で幸徳の手で小島龍太郎から保証金を借出し、堺の手で加藤時次郎から創業費を借出して、いよいよ「週刊平民新聞」を出す事になった。その時、社会主義協會では、幸徳堺の萬朝退社を記念する爲めに慰勞會を開いた。この會合には片山潜排拆の陰謀が秘んでゐた。出席者の一人が幹事の改選を發議して投票をやつたが、それに西川光二郎と齋藤兼次郎との二人が當選した。片山の手許にあつた帳簿も、少額の會金も新幹事の手に移つたが、この二人は平民社の同人であるから、社会主義協會の中心は平民社に移つたのであつた。同時にその席上で週刊平民新聞の發行を披露した。

その十月、平民新聞を發行して、非戰論の叫びをあげた。發行所は麴町有樂町の一角であつた。編輯局には、幸徳、堺の他に、西川光二郎、石川三四郎などがゐた。安部磯雄、木下尙江の二人は外から援助した。その中で石川三四郎は、堺と加藤との間に立つて資金の奔走をした福田英子の代表として加はつた者だと聞いてゐる。石川は基督教信者で、安部などとその傾向を同じくしてゐた。

平民新聞は社会主義運動の氣勢を煽つた。若い青年書生の投じて來る者が多くなつて、讀者に

五千を數へたが、感情の冷熱常ならざる若い讀者の事であるから、次第に減少して、營業が困難になつた上に、一方、激烈な筆の爲めに、罰金、禁錮が續出して、その後から禁止が來た。幸徳も筆禍を買つて巢鴨監獄に近られると云ふ有様であつた。それでも平民社同人は屈せず、加藤白柳、山口などが別働隊として出でてゐた「直言」と云ふ月一回の雑誌を平民新聞の代りにして發行したが、その内に同人間に反目が起りなどして、三十八年十月、終に平民社は解散となつた。平民社内で、堺と西川とが、それぞれ同棲してゐた婦人と自由戀愛に陥つた事なども原因の一つであつた。木下尙江が代議士の後補者に立つて三十二票の投票を得たのはその前後であつた。

平民社解散後の人々の行動はと云ふと、木下、安部、石川は雑誌「新紀元」を出し、西川、山口は雑誌「光」を出し、堺利彦は雑誌「社会主義研究」を出した。

三十九年二月になつて、幸徳、西川、片山、加藤の四人へ田添鐵二を加へて、「日本社会黨」と云ふのを組織した。四十年の頃、某新聞に出たその黨の評議員の略歴を掲げてみやう。

▲野澤重吉 職業は人力車夫にして京橋尾張角に尾角組を組織せり、年五十許。

▲藤田四郎 神田仲猿樂町廿番地にミルクホール豊生軒を經營せり、年四十餘。

- ▲田添鐵二 夫人幸枝氏と共に小石川久堅町圓光寺境内に私塾を開き、繪畫、英語等を教授し居れり、夫妻共に米國大學に學べる人、年三十二。
- ▲幸徳 年は三十七。
- ▲松崎源吉 神田五軒町に賣藥店を出し、別に英語の教授をも爲し居れり、年三十五。
- ▲椎橋重吉 久しく廣告業に従事せし人にして、今は平民社廣告部主任なり、年三十一。
- ▲森近 地方官吏、後神田三崎町にミルクホール經營、今は平民社販賣部主任。年二十八。
- ▲深尾詔 監獄給仕、裁判所雇、小學校教員等の職を経て、今平民社編輯局に在り、年二十八。
- ▲岡千代彦 元都新聞に在り髭のある職工として有名なりしが、今は芝新田町に自由活版所を有し兼て平民社員たり、年三十五。
- ▲竹内餘所次郎 藥劑師なり、年四十二。
- ▲幸内久太郎 鍛冶職の親方にして器械工藝に關し智識多き人なり、年四十餘。
- ▲石川三四郎 基督信者にして平民新聞記者なり、年三十二。
- ▲西川光二郎 屢々兇徒を嘯集するを以て有名なり、年三十二。

- ▲樋口傳 書畫骨董賣買紹介の事を業とせり、年三十五六。
 - ▲山口義三 東京政治學校の出身にして、今平民新聞記者たり、年二十五。
 - ▲堺利彦 平民新聞記者たり、年三十八。
 - ▲齋藤兼次郎 筆製造に要する金櫛の職人にして兼て平民社員たり、年四十六。
 - ▲安井有恒 青山學院事務員たり、年四十餘。
 - ▲安仲逸平 南品川五丁目に葉茶屋兼餅煎屋を營めり、年四十餘。
 - ▲添田平吉 流行唄讀賣を業とす、年三十。
- 四十年二月、又資金を出す者があつて、日刊平民新聞を出し、平民社を再興した。『新紀元』と『光』とは、それが爲めに廢刊したが、木下は同人とならなかつた。新聞の生命は僅に三ヶ月であつた。幸徳はその新聞に、『余が思想の變化』と云ふ一文を發表した。これが爲めに議會政策を理想とする田添等との論争の種を蒔いた。日本社會黨の會合には何時も議會政策派とクロボトキン派とが激論した。その結果、兩派は絶交するなど四分五裂して明治の時代を經過した。

薬指の曲り

Faint, illegible text on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.

Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

——これは、私が近頃知り合つた醫學士の話しである——
私の父と云ふのは、私の家の養子に来て、醫師になつたものでありまして、もとは小學校の教師をしてをりました。その當時は、醫師に免許状を持たした時で、それまで醫師をやつてゐた家へは、内務省からお情け免狀をくれました。で、父は祖父が亡くなりますと、その儘家業を續いで醫師になりました。

父が亡くなつた時が七歳でしたから、連續した記憶はありませんが、それでもちよいちよいした事は覚えてをります。父は何時も淋しさうな顔をしてをりましたが、それでゐて人づきの悪い方ではありませんでした。口元には赤茶けた口髭がチョビリと生えてをりました。父は私を非常に可愛がりました。他所へ行つて泊るやうな事があると、私が怪我をしやしないか、不意に病氣になりはしないかと思つて、眠られなかつたと云ひます。これは私の故郷の言葉であります。私の故郷では、嬰兒のことをやゝと云ひますが、父は五歳になつても六歳になつても、私をやゝと呼んで、好く母に笑はれたと云ひます。

『あの向きぢや、十歳になつても、二十歳になつても、やゝと云つたかも分らない。』

と、母が好く云ひました。そんな人でありますから、母に對しても非常に優しくつたと見えます。それは養子と云ふこともありましたが、併し、一體におとなしい生れであつたやうに思はれます。従つて氣も弱かつたでせう、大きな怪我をした者でも來ますと、患者よりも父の方が驚いて、顔色を眞蒼にして治療をしたと云ひます。

ある時、腰に腫物の出てゐる患者の局部を、父が恐る恐る切開してゐると、患者の方から、

『先生、そんなに痛くはありませんよ、ひと思ひに切つて下さい。』

と、云つたと云つて、これも母が私に話しました。その父が亡くなりますと、親類では、母がまだ若いし、家業が家業でありますから、母に養子をして、醫師をやらさうと云ふ事になりましたが。何と云つても母が承知しません、尤も、間もなく醫術開業試験の規則が出來て、もうお情け免狀を相續する事は出來なくなりましたが……、併し、その時直ぐ養子をする、まだ一代はその恩典に浴する事が出來ましたが、私の家にはちよつとした財産が有りまして、その日に困ると云ふ程でもありませんでしたから、親類もそのまゝにしてありました。

父から比べると、母はしつかりした、勝氣な所がありました。その母が、私が八歳の夏でした、

今、考へるとチブスのやうな病氣になつて、非常に熱があつて、その頃南の方から流れて來てゐた山田と云ふ醫師にかゝつてをりましたが、その醫師がどうも癒るのが困難むづかしいと云ひ出したので、親類の者が代りばんこに看病に來てくれましたが、大病と云ふので、何人も家の内で大きな聲をする者がなく、親類の者同志で顔を見合はすと、何か黒い重い物が眼先に浮んでゐるやうな顔をしました。それを見ると、私も子供心に悲しいとも恐ろしいとも、何んとも云へない氣になつて、母の枕頭へ行つたり、次の室で親類の者のひそひそと話してゐる所へ行つたりしてをりました。

所が、ある夜、むし暑い晩でした。その時は、何時も親類の何人かが必らず一人は坐つてゐてくれる母の枕頭に、何人もゐないで、私一人が座つてをりますと、玄關口の方でカラカラと云ふ下駄の音が聞えました。そして、暫くすると、一人の醫師が小さな藥籠を手にして這入つて來ました。私は山田先生が來てくれたと思つてゐると、醫師は母の枕頭へ、私の方へ右斜に向くやうに坐つて、白い右の手を母の額にやつて、そつと撫でながら、私の方を見て、
「昨夜も來たが、お前には逢はなかつた。」

と、人懐い聲で云ひました。その聲が濁りのある山田先生の聲と違つてゐるので、その顔を見ると、顔はつきりとしませんが、白い顔で薄い口髭がありました。

「大事の病氣ぢや、好い藥を持つて來たから飲むが好い。」

と、醫師は云ひました。すると、母が小さな聲で、

「山田先生の藥が好い、山田先生の藥なら飲みたい。」

と云ひました。私は母が人の親切を無にするやうに思ひましたから、

「お母さん、先生があゝ仰つしやるから、飲んだら好いぢやありませんか、」

と云ひました。それでも母は、

「私は山田先生の藥を飲んでをりますから、他の人の藥は飲みません。」

と云つて、頭を動かすやうにしました。私は頑固な母が憎くなりました。

「お母さん、そんな馬鹿な事を云ふもんぢやありませんよ、」

と云ひました。と醫師は私の方を見て、

「ぢや、私が此處へ藥をこしらへて置くから、お前が飲ますが好い。これを飲むと直ぐ癒るから、」

と云つて、藥籠を膝の上を取つて、それを開け、中から何か藥を出して、それを紙片に入れかけました。行燈の光がほつかりと膝の上にありました。私は先生がどんな藥を出すだらうと思つて、その方を見てをりましたが、私の眼は、ふと醫師の右の手の藥指に吸ひつけられましたが、その右の藥指はすこし曲つてをりました。指の恰好から藥を盛る工合が亡くなつた父そつくりであります。私はその指から、何時となしにその醫師が父のやうな氣になりました。

『それでは、お父さんが藥を持つて來てくれた。』

と思ひ出しましたが、亡くなつてゐる者が來たと云ふ不思議も、それに對する驚きも起らないで、非常に父が懐かしかつたのであります。

その内に醫師は藥を盛つてしまつて、それを包みにして母の枕頭の盆の上に置いて、

『私はもう歸るから、お前が飲ましてやるが好い。』

と云つて、醫師はすうと起つて、襖の外へ出て行つてしまひました。私はその藥の事が氣になつてをりましたから、直ぐ母の枕頭へ行つて、その包みを開けて、

『お母さん、おありがとうございます。』

と云ひますと、母は何も云はずに口をすこしあけましたから、急いでそれを口に入れて、茶碗の水を取つてそれに注いでやりますと、母は眼を開けて、

『どうした。』

い云ひました。私は、

『お父さんの藥を飲みました。』

と云ひましたが、その夜明けから母の熱がさめて、翌日の夕方には、もうお粥をたべるやうになり、それが二三日の内に、癒つてしまひました。で、私が父が來た話をすると、皆不思議がりました。その時、次の室には親類の者が三人ばかりもゐましたが、無論下駄の音も聞かなければ父の來た事も知らないとの事でした、たゞ母のみは、父が枕頭へ來た夢を見たと言ひました。

ふと眼を覺ましてみると、電燈の光が薄赤く室の中を照らしてゐた。謙蔵はびつくりして眼を睜つた。確に眞黒な空家の中へ這入つて寢た事を覺えてゐる彼は、もしや、俺は夢でも見てゐるのではないかと思つて、自分の體に注意してみた。右枕に寢て右の手を横にのびのびと延ばし、左の手を胸のあたりに置いてゐる自分の姿が眼に映る。駒下駄を裏合せにして、それを新聞で包んだ枕の痛みも頭にあつて、確に宵に寢たまゝの姿である。故郷の父親が病氣になつたと云ふ電報を遅くなつて受取つた彼は、牛込の天神町へ行つて、もう寢てゐる先輩を起して旅費を借り、小石川原町の下宿へ歸る積りで、十二時近くなつて大日坂まで来て、やつと坂をあがつた所で、大きな雨になつたので、雨宿りにと傍の軒下に駈け込んでみると、その戸口に半紙を貼つてあつた。煙草を喫む拍子にマッチの火で見ると、それは貸家の札である。雨は急に晴れさうにもないし、汽車も翌日の午後でないと乗れないから、其所で一夜を明かす積りで、雨戸に手をかけると苦もなく開いたので、内へ這入つて寢た所であつた。彼は半身を起すやうに體を俯向けにして顔をあげた。八疊ばかりの何も置いてない室ががらんとしてゐる。頭の行つてゐる方は床になつてゐるが、其所も龜裂の入つた黄ろな壁土が佗しさうに見えるばかりで軸らしい物もない。見た所

どうしても空家としか思はれない。電燈の點いたのは、借家人が引越した時にスイッチを切らずにその儘にしてあつたのが、故障の爲めに消えてゐて、それが何時の間にか點いたものらしいと彼は思つた。

戸外には物のうみ潰えるやうな雨がびしょびしょと降つてゐる。彼はいよいよ空家と云ふ事を確かめると、又横になつて駒下駄の枕に頭をつけた。暖な空氣のふうわりと浮んだ夜であつた。彼は病氣だと云ふ父親の事を考へ出した。古い古い家の奥の間で、煙草の脂で黒くなつた二つ三つ残つた齒を出して、仰向けに寢てゐる父親の姿を浮べた。と、物の氣配がした。咳とも何んともつかぬ物の音であつたが、それは人の氣配であつた。苦學しながら神田の私立大學へ通つて法律をやつてゐる彼は、體に悪寒の走るのを感じた。平生の疎放から他人の住宅へ侵入した結果になり、その上強窃盜の嫌疑をかけられても仕方のないやうになつた、己の所業を恐ろしく思つた。隣の室では、又物の氣配がした。彼は怪しまれて騒がれない中に、此方から聲をかけて、事情を話して謝罪らうと思つた。

『もし、もし、』

咽喉が乾からびて聲の出ないのを無理に出して、體を起して座つた。隣の室と境になつた襖がすうと開いて、背の高い女の姿が見えた。

「私は決して怪しい者ではありません、雨に降られたもんですから、空家と思つて這入つたんです。何んとも申譯がありません。」

「何んとも思やしませんよ、もう、お眼がさめましたの、」

「……空家と思つたもんですから、すつかり眠つてゐたんです。どうも濟みません。」

謙蔵は安心して女の方をはつきり見た。瘦ぎすの體に友禪模様の長襦袢を着た、二十四五に見える廂髪の女であつた。

「貸家札を貼つて置いたから、空家と思つたのも無理はありませんよ、」

「どうも濟みません。」

「なに好いんですよ、」

と、女はその前に坐つて、白い顔を重さうにして、

「貴郎は、福岡の方でせう、」

「福岡ですが、どうして知れます。」

「お言葉の工合で知れます。」

「あ、さうですか、」

「近い内にお歸りなさるやうな事はございませんか、」

「爺親が病氣で、明日の汽車で歸ります。」

「さう、明日の汽車で、ではすこしお願ひしたい事がございますが、聞いて戴けませうか、」

「どんな事ですか、」

「なに、ちよつとした事でございます。お手間を取る事ではございません。」

「承知しました。」

「ではお願ひ致します、貴郎は福岡市の——町を御存じですか、」

「好く知つてをります。停車場から我家へ歸るには、どうしても其所を通るやうになつてをりますから、」

「では、どうかお願ひ致します。」

「——町に御存じの方でもおありですか、」

「彼所に山路と云ふ酒造家がありますが、御存じでございますか、」

「山路なら知つてをります。』

「その山路でございますが、すこし私に考がありますから、」

と、女は膝の上に置いてゐた左の指に右の指をやつて、さしてゐた黄金の指環を靜に抜いて、

「これを貴郎にお願ひ致しますから、福岡へお歸りになるまで、これを指にはめてゐて下さつて、山路の前へ行つた時に、これを抜いて地べたへ落して下さい。』

謙藏は妙な事を云ふ女だと思つて、耳を立てた。

「それは別に何んでもありません。たゞちよつとした禁厭でございますから……、それで、一度地べたへ落して下されたなら、もう用はありませんから、直ぐ拾つて貴郎の所有にして下さい、お禮にさしあげますから……、」

謙藏は薄氣味悪く思はないでもないが、生死の分らない病人の所へ歸つて行くのに、汽車賃以外に一錢の小使のないのを、心苦しく思つてゐる所であるから、その心は黄金の指環に引付けら

れた。

「ちや、山路の前へ、たゞ落したら好いんですか、」

と云つて、彼は女の差し出した指環を受け取つた。

「結構でございます。』

「僕には意味が分らないが、落す位の事なら何んでもないんです。』

「それで何人にも仰しやらずに、人に知らすと駄目になりますから、」

「何人にも知らさないやうにしませう、」

「それからどうぞ、此所から差して行つて、どんな事があつても途中で抜かないやうに、それも抜くと駄目になりますから、」

「そんな事は大丈夫です。』

「ではお願ひ致しました。』

「承知しました。』

雨の音はもうしなかつた。謙藏はほうとしてゐた氣が引締つたやうになつた。彼は指環を左の

指にさした。

『もう、夜が明けたんですね、雨もやんだやうだ。ちや失敬ませう。』
『まだお早いでせう。』

女は蒼い顔をしてゐた。謙藏は女が冷たくなつたやうに思つた。彼は早く下宿へ歸りたくなつた。

『荷物の拵へもありませんから、』

『さうですか、では、何分宜しく、』

『承知しました、それでは失敬します。』

謙藏は女に挨拶をしてから、傍にある新聞包みの下駄を持つて起つた。女もすうと起つて後から送つて来たが、謙藏が玄關に降りてもう一度挨拶をしようとして背後を見た時には、もうゐなかつた。そして、気が付いてみると、玄關は眞黒で今まであつた電燈の光はなかつた。彼は消燈の時刻にしては、すこし早いと思つて、雨戸を開けて出た。果して戸外はまだ眞暗で、所々雨雲の切れた空に、朧の星が物凄く光つてゐた。

街路には晩春の午後の陽が明る射して、町はひつそりとしてゐた。其所所の塀越しに枝を張つてゐる若葉にも風がなかつた。今、著いたばかりの謙藏は、黒い風呂敷包を小脇に抱へて、——町の方へと曲つて来たが、彼は奇怪な指環を酒造家の前で落さうとして、左の指にさした指環を氣にしいしいして歩いてゐた。

四辻になつた左側の向ふ角が、昔から見馴れてゐる酒造家の山路であつた。謙藏は四辻を歩きながら、店先に注意した。店の横手には二人の店男が、大きな桶に徳利を浸して、それをせつせと洗つてゐた。店先には暖簾がだらりと垂れて、人の姿はなかつた。指環を落すには又とない機會であつた。彼は急いでその前へ行つて、そつと指環を抜いて、顔に向ふに向けたなりに落した。指環はちろちろと轉んで店先の敷石の上に行つて止まつた。同時に彼はびつくりしたやうな風をして、その四邊をきよきよと見廻はし、やつとそれを敷石の上に見付けたやうにして、急いで拾つた。店の内に人のゐたか否かは、きまりが悪いので顔をあけて見る事が出来なかつた。彼は走つて、その前を歩き過ぎたいのをぢつと堪へて、その指環をもとの指に持つて行つた。

女の悲鳴が不意に起つた。謙蔵はびつくりして立ち止まつたが、その眼は視線が定まらなかつた。續いて數人の男女の叫ぶ聲がした。それは、酒造家の内からであつた。謙蔵は振り返つて店の内を覗いた。罵り叫ぶ聲が其所にも起つて、黒い人影が入り亂れた。赤ら顔の大きな男が悶掻き走るやうに店の内から飛び出して來た。それは、山路の主人であつた。と、その後から若い男が血に染つた白刃を振りながら追つかけて來た。謙蔵は恐れて、二三十間ばかり逃げ走つて、やつと後背を振向いた。若い男が街路の真中で、人の死體に腰をかけて腹に刀を突き通した所であつた。

謙蔵は氣が遠くなつてしまつた。彼は非常を聞き付けて集まつて來た町の人の手當を受けて我に歸つた。確に差した筈の指環はもう指になかつた。

山路の主人を殺した者は、一二年前に法科大學を卒業した主人の弟の法學士であつた。彼は不意に日本刀を抜いて裁縫してゐる己れの女房を殺し、それから店へ出て主人を殺し、そして、己れもその刃に斃れたものであつた。

世間ではそれを財産の争ひとしたが、謙蔵は、これを恐ろしい因果話として、何時か私に話した事がある。

指環の奇怪を見せられた謙蔵は、それとなしに山路法學士の素行を調べてみると、山路は在學中、ある官吏の未亡人と關係して、その未亡人の手から金を取り出して、それで放蕩をしてゐる内に、未亡人は一人の娘を残して病死した。病死する時未亡人は、山路に娘と結婚してくれと頼んで死んだ。山路は好い加減な返辭をして、病人を安心させて置いて、いよいよ未亡人が亡くなると、残りの財産を蕩盡してしまつた。娘は母の命もあるし、すつかり山路を信頼してゐる所から、山路のする儘にしてゐると、山路は卒業してふいと福岡へ歸り、何時の間にか土地の女を細君にしてゐた。そんな事があつてから東京にゐた官吏の娘は、不意に家出をして生死も分らなくなつてしまつた。

謙蔵は又或人から、女から指環を頼まれた家が、最後に娘の住んでゐた家であつたと聞かされた。謙蔵は私の知合の某宗教者の變名である。

檢
事
局

年代は忘れたが七月二十日、本郷に行つて、大學病院の處方箋で藥を買つて歸つて見ると、玄關を這入る足音を聞きつけた妻が、あはただしく出て、「裁判所から呼びに來ました。」と云つた。臨月に近い妻の顔には、恐怖の閃きが上つてゐた。私も不安を感じずには居られなかつた。「大塚警察の巡查さんが書いたものを持つて來て、直ぐ裁判所に行けつて歸つたんですが、何でせうね、」と云つて、妻は次の間の六疊の押入れに入れてあつた書附を持つて來た。

「取調の件、東京地方裁判所山田検事の許に速刻出頭すべし」と書いてある。私は書附を持つたなりに考へた。検事局の召喚であるから、何か自分は嫌疑がかまつてゐるだらうが、それなら何事であらう、別に強盜殺人の嫌疑でもあるまいかと考へて、ふと自分の周圍はゐる浪人仲間の事を思ひ出した。激烈な思想を抱いて當世の政治を批評してゐる過激な友人の顔などが私の頭を掠めた。と、私は、その友人と召喚とに何か關連がありはしないかと思ひ出した。私は恐ろしい或る事件を思ひ出して呼吸がつまるやうになつた。が、何時の間にか、そんな事を仰山に考へるのが馬鹿らしいやうな氣になつた。そして、顔をあげて玄關側の三疊の窓越しに眼を遣ると、燃えるやうな二時頃の陽がキラ／＼と光つて、猫の額のやうな庭の隅に植ゑた鳳仙花の青い葉が萎れ

てゐた。

妻の傍には、その日から學校の休みになつた十二になる長女が、もう泣き出しさうな顔をして坐つてゐた。その時、私はふと、自分の文章ではあるまいかと思ひ出した。うは滑りの印象記ではあるが、一寸激烈な文章を書いた事があるので、それを秩序紊亂に當るものとして起訴せられたものではあるまいか、それとすると、三四月の入獄と數十圓の罰金は免がれないと思つて恐れた。その他に一つ考へた事は、私の家に入出入する鶏鳴狗盜の輩が、詐偽か竊盜でも違つて引合に出されたでは無いかと云ふ事であつた。「△△さんが何か悪い事でもしたではないでせうか、」と妻も云つた。

何はともあれ、兎に角出かけることにして、澤山の鼻紙と、手拭と、紫縮緬のフクサに入れた藥壘と、氷袋とを持つて家を出たが、玄關で下駄を履きながら、妻を顧みて、「直ぐ歸らなかつたら、某々の四君に通知するが好いだらう、」と云つて注意した。私の姿が見えなくなると、長女が聲を立て、泣いた。

私は清水谷から電車に乗つた。電車の中でも、恐ろしい疑問が私の頭を掠めて行つた。私はい

ろく／＼と考へながらも、この恐怖は皆犯罪者の嘗める恐怖であらうと思つた。この恐怖こそ、犯罪人にとつて斷罪入獄よりも恐ろしい、そして神経を惱ます恐怖であらう、人は此の恐怖に打ち勝てるなら、斷罪入獄の恐怖には平氣であることが出来るのだとも思つて見た。春日町で三田行の電車に乗換へる時、停留場の夕刊賣には、「小石川七人殺の縛捕」と口々に叫んでゐた。私の神経は又惱まされた。

日比谷の乗換を利用して、氷店で氷塊を買つて袋に入れ、それから櫻田門外で電車を捨て、司法省の次、霞門外の通りの角になつた赤煉瓦の毒々しい裁判所の門を這入つた。

門衛に教はつて、裁判所の建物の左側になつた検事局に上つて行つて、廊下に机を据ゑてゐる受付に通知書を渡すと、「右に行き詰めた所を左に下りて待つてお出でなさい」といつた。

云ふ通りに右に行き詰めて、左に五六段の階段を下ると廣い廊下で、其處は裁判所の前面になつてゐた。高い西洋館の窓は、庭の葉櫻が青い影を落してゐた。廊下の左側は地方裁判所の刑事部第一號の法廷で、並んで第二號法廷があつた。廊下の腰掛には、三四人の人がゐた。私は氷袋を頭に載せて、窓を背にして腰をかけてゐた。検事局の方から巡査が下りて來たり、此方から又

上つたりした。二號法廷の口にも一人の巡査の横姿が見える。中には數人の人が居るらしいので氷袋を下ろして傍に行つて見ると、裁判をやつてゐた。二十四五の書生らしい男が、裁判官の問ひに對して何か答へてゐた。まだ他に六七人の被告人が手錠をはめられたなりに、腰掛に並んで腰を掛けてゐた。十二三人の傍聴人も見えてゐた。「お前は下谷の黒門町の某家でも、二圓五十六錢の無錢飲食をやつた事があるだらう」と云ふ裁判官の聲がした。被告の聲が小さくなると、「何、何」と、裁判官は鋭い聲で問ひ返した。

三錢で買った氷塊が解けて無くなつた頃、小使が下り口にあらはれて私の名を呼んだ。早速行つて上の廊下に立つと、應接室の一つに連れて行かれた。小さな室には、三個の卓子があつて、それに二脚づゝの椅子が据ゑてあつたが、一方の椅子は皆赤かつた。「その赤い椅子におかけなさい」と小使が云つた。取調を受ける者は赤い椅子にかけるのだと知つた。

刻煙草を一服する位も待つてゐると、白いリンネルの洋服を着た検事が硯箱と罫紙を持つて這入つて來た。顔の小さな鼻の下に少し鬚のある若い検事である。一寸頭を下けて扇を使つてゐると、検事は硯箱の蓋を開け、墨を磨りながら、先づ年齢から學歷を聞きはじめた。私は聲に應じ

て答へた。呼吸が止まりさうな恐ろしい暑さが迫つて來た。検事は遅い筆で一二字書いては考へ考へしながら「どうも暑い暑い」と云つて書いた。私は検事の遅筆を知つたので、靜かに談話筆記の學生に話してやる氣になつて返事をしたが、それでも召喚せられた原因が分らないので、不安で堪まらなかつた。恐らく何人か傍に見てる人があつたら、私の顔に沈痛の色が漂つてゐるのを見たのであらう。學歴の次に職業を聞き、それが濟むと、今度は何か著書があるかと云ふから、著書の名を云つてやると、検事は不審さうに首をかしげてゐるが、やがてある書肆の主人の名を出して之を知つてゐるか聞いた。知つてゐると云ふと、昨年の暮に其處へ何か原稿を賣つたことはないかと聞いた。それを聞くと、私の胸は急に晴々とした。忘れてゐた扇を急に動かして、私は胸を反らして背のびをした。

それは、私が仲介して或る知人に書かした原稿に對する著作権侵害の取調であつた。真相は云ふを好まないが、數百の金錢で落着する事件であつた。——三十分の後、私は日比谷公園内にある松本樓の木影のベンチに倚つてアイスクリームを啜つてゐた。

姉妹の復讐

明和二年四月十六日、水戸の城下では例年の如く東照宮の祭禮があつた。そして、その年の年番は、竹原町と云ふ事になつてゐたから、竹原町の者は、それぞれ手を分つて、参詣の群衆の踏しないうやうにと取締つてゐた。沖田屋と云ふ煙草屋の主人の茂平も、持ち場になつた自分の家の前に出てゐた。

大番頭の中川大右衛門が、その日の警固奉行であつた。彼は一人の供を伴れて、年番の番々を見廻はつてゐたが、夕方になつて茂平の家の前へ來た。風の暖かな道路には、往來の群衆が渦を卷いてゐた。茂平は額から汗を流して、その群衆を制してゐたが、ふと、この手が大右衛門の刀の鞘に當つた。茂平は吃驚して、地べたに蹲ん。その粗忽を詫びやうとした。短氣な大右衛門は、突然刀を抜いて茂平に斬り付けた。茂平は血を浴びて斃れた。傍にゐた名主が驚いて駆け付けた。「無禮を働いたから斬つて捨てた。」と云つて、大右衛門は拭いた血刀を鞘に收めて向ふの方へ行つた。

群衆は恐怖して散つて行つた。家の前の只ならぬ雑踏を聞きつけて二人の少女が家の中から出て來た。それは茂平の娘であつた。二人は血に染まつて倒れてゐる老人が、直ぐ自分の父親だと

知つた。二人は裸足で駆けおりて行つて父親に取付いて泣いた。母親のお幹も子供の泣聲を聞いて、狂氣のやうになつて飛び出して來た。

茂平の娘は一人をお春と云ひ、一人をお花と云つてゐた。二人は雙生兒で、二人とも十四歳であつたが、お春を姉としてあつた。

お春とお花は、少女ながらも父の讐を討ちたいと思つた。二人は辻田村と云ふ所にある母親の實家へ母親を頼んで置いて、明和三年五月二十三日、武藝の師匠を尋ねて家を出た。

湯本の湯治場へ行つた時、平の家中に戸田逸角と云ふ、武藝も人品も優れた武士があると云つて、ある人が教へてくれた。二人は平を心ざした。

平は安藤對馬守の城下であつた。二人は平へ著いて戸田の屋敷へ行つて、奥方に取次を頼み、二人は幼少の時兩親に死別れ、親類の者の世話になつてゐた所が、その親類は悪人で、家も田地も押領した上で、二人を廓へ賣らうとしたので、仕方なく逃げて來た者である、給金などに望みはない、助けると思ふて召使の中へ加へて貰ひたいと、口から出まかせな事を云つて頼んだ。戸

田の奥方はそれに同情して召抱えてくれた。

二人の奉公振は、普通の奉公人と違つてゐた。二人は奥方に氣に入られた。二人は奥方の命で表長屋に設けた道場へ茶菓子を運んで行くやうになつたから、毎日門弟達の相手になる主人戸田逸角の竹刀を持つ手を見る事が出来た。

ある夜、戸田の養子の平九郎が、眼が覺めてみると、勝手の方に當つて竹刀の音が聞える。不審に思ふて、そつと起きて手探りに勝手の方へ行つてみた。勝手の上には蠟燭を點け、二人の女が庭先で劍法を學んでゐた。お春とお花であつた。

平九郎は二人に何か目的があるらしいと思つたので、二人に知らさないやうに寢床へ歸り、翌日これを養父の逸角に話した。逸角も二人に何か目的があるだらうと思つたので、二人を呼んで聞いた。

『その方達は、夜半に武藝の稽古をしてをると云ふ事だが、只身のたしなみに稽古してをる所か、それとも何か仔細があつての稽古か、若し何か仔細があるなら、本式に稽古をしてやつても好い、包まず話したら何うだ。』

二人は黙つて顔を見合はしてゐた。

『何か仔細があるであらう、話したら何うだ。』

お春は包まかに身の上を話した。

『さう云ふ事なら、今日から奉公するに及ばない。武藝ばかり稽古するが好い。』

逸角と平九郎とは、その日から二人に武藝の稽古をしてやる事になつたが、何時の間にか普通の人の三四年もやつた位の腕になつてゐたから、半年ばかりすると、もう立派に鬪討が出来るやうになつた。

『その方達は、何時鬪に出逢つても遅れを取らない腕になつた。國許へ歸つて鬪討をするが好い。』

逸角は二人の者に言ひ渡して、近々國許へ歸さうとしたが、門弟の勵みにもなる事だと思つて、ある日、門弟達にはじめてお春とお花の素性を話した。

『今日はお名残りに二人に試合をさすから、後學の爲めに見て置くが好い。』

門弟の中に石山傳内といふ腕自慢の侍があつた。彼は師匠が女を褒めるのを氣に喰はなかつた。『女同士にやらしても腕前が分らないと思ひます。私が相手になつて眞劍勝負をやりませう。』

と、傳内が云つたが、傳内の腕ではとても勝てないと思つたから、逸角はそれとなく傳内を止めた。

『女子に勝つた所で、さう手柄にもならないだらうから、そんな事は措くが好い。』

『先生があんなにお褒めになる女子でございますから、やつてみない事ぢや何人が勝つか分つたもんでありません、是非私が一手勝負を致します。』

傳内は強いて刀を持って道場の中へ出たので、お春が相手になつた。傳内はお春の振袖を切り落した。傳内は勝負に勝つたのだと喜んだ。

『傳内殿には、とうに簪を打ち込んでありますから、この勝負は私の勝でございます。』と、お春が莞爾と笑つた。

傳内の襟元にはお春のさしてゐた象牙の簪が打ち込んであつた。傳内は又お花を相手に渡り合つた。傳内はお花の持つてゐた薙刀の石突の所を三寸ばかり切り折つた。傳内は今度こそ勝つたと思つた。

『私の針を三本、傳内殿の髪の中に打ち込んであります。』とお花が笑つた。

傳内は面目を失つた。そして、これが評判になつた爲めに改易の上、追放になつた。

明和五年五月十八日、お春お花の二人は、平の城下を出發して、水戸在辻田村の叔父の家へ歸つたが、歸つてみると、母親は病死してゐた。二人は手を取り合つて泣いた。

平の城下を追放せられた傳内は、お春お花の二人を怨んで、その腹癒に二人より早く水戸へ来て、中川大右衛門に逢つて、お春お花が讐討に歸らうとしてゐる所であると云つた。大右衛門は茂平を殺した爲めに未だ閉門を命ぜられてゐる所であつた。彼は恐れて、傳内に頼んで家財道具を賣拂つて、二人と行き違ひに、女房を伴れて跡を暗ました。

お春お花は母に死なれた上に、驛に逃げられたので、再び逸角の許へ引返した。逸角は二人を勵まして、大右衛門を探しに旅へ出した。

二人は北國をさして出發した。そして、秋田の城下へ行つて、ある商人の妻の情で、この家で世話になつて、驛の所在を探してゐるが、手掛りがないので、翌年の三月、秋田を出て津輕の方へと行つた。ある山坂を登つて、峠へ行つて腰をおろして休んでゐると、向ふの坂から三人連の盛

無僧がやつて来た。虚無僧の一人は傳内であつた。傳内は伴の虚無僧の耳に呌いて、不意に二人に切つてかかつた。二人は仕込杖の刀を抜いて、追つて来た傳内の伴れの虚無僧を切り倒した。傳内は恐れて逃げた。

二人はその翌日、津輕の城下へついた。其所に弓弦大明神と云ふ社があつた。二人は道の傳手に參詣して、拜殿の傍で休んでみると、三人連の侍が參詣に来た。その侍の一人は拜殿の横にかけた奉納の發句の額を見付けて話し出した。

「この來水と云ふのは何人だらう、」

「去年水戸から来た中田大治と云ふ浪人の雅號だ。」と、伴の侍が答へた。二人はそれを聞いて中田大治は大右衛門かも分らないと思つた。二人は眼を見合はした。

お春は顔に墨を塗り、膝に馬の杓をくよりつけて、膝行兒となり、藥王山現昌寺の傍にある乞食ヶ原と云ふ所に行き、お花は花房彦四郎と云ふ武家に奉公した。

ある日、お花は奥方の代參で現昌寺の藥師堂へ參詣に行つたが、その歸りに乞食ヶ原を通つた。

お春は原の中に坐つてゐて、お花を迎へて、小聲で囁きはした。

お花はやがて主人の許へ歸つた。中山大治と云ふ客が来て主人夫婦と話してゐた。お花は其所へ呼ばれたが、大右衛門の顔は知らなかつた。

「中田の旦那が、今度江戸へお上りになるに就いて、十日ぐらゐお前をお手傳にあける事にしました。これから中田の旦那のお供をおしなさい。」と、奥方が云つた。

お花は又とない機會を得たから、大右衛門か大右衛門でないかを試めさうと思つて、内心に悦んで中田へ伴れられて行つた。

その夜、中田へ一人の道具屋が刀を持つて来た。中田はその刀を抜いて焼刃を更めながら、獨言のやうに云つた。

「永代橋邊で試し斬をしようかなア、」

「江戸へ行かなくても、今度乞食ヶ原に女乞食が来てをりますから、それを斬つては如何でございます。」と、下男の駒藏が横合から云つた。

中田は道具屋と下男とを伴れて、その刀を持つて出かけた。お花は姉の身の上に危難が降りか

かつたのを知つて困つてゐた。その内に中田が一人で歸つた。
 『乞食は手強い奴で、駒藏はやられた。これから加勢を伴れて行つて、殺さん事にや腹の蟲が収まらない。』

中田は著込を著て、装束をして出かけた。お花は立つても居ても居られなかつた。そのおづおづする容を中田の妻が見て笑つた。

『こんな事が恐くて武家の奉公が出来るものか、家の旦那は水戸に居る時に無禮者を手打ちにした事がある。』

お花は躍りあがつて女を蹴倒し、それを柱に縛りつけた。

『中川大右衛門の爲めに殺された茂平の娘であるぞ。』

お花は其から走つて花房家に行き、父の驛の事を話して、彦四郎と一所に乞食ヶ原へと駆けつた。月の明い晩であつた。乞食ヶ原では、お春が竹杖に仕込んでゐた刀を振り翳して、左右に追つて来た大右衛門の一行を睨んで立つてゐた。

『中川大右衛門待て』と、お花が聲をかけた。

大右衛門の加勢は彦四郎の来たのを見て皆逃げた。大右衛門は一人逃げ後れて、うろうろして立つた。お春お花は左右から飛びかゝつて、大右衛門を生捕つた。

中川大治の中川大右衛門は津輕から水戸へ送られた。水戸では那珂の湊に竹馬たけうまをこしらへて、お春お花に復讐をさせた。それは明和六年八月十四日の事であつた。

お春は後に戸田逸角の養子平九郎と結婚し、お花は花房彦四郎の子息彦太郎と結婚した。そして、沖田屋は、良助の末子が相續した。

くるわの門

Faint vertical text on the left page, likely bleed-through from the reverse side.

Faint vertical text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

晝飯が済むと三人は家を出た。朝の中に霧のやうに煙つてゐた雨は歇んでゐたが、薄暗い陰鬱な空は、低く頭の上に押つ冠さるやうになつてゐた。立ち止つて、瞳を動かさずに見てゐると、一色に曇つた空に、夢のやうな綾が見えて、雲の動いてゐるのが知れる。

春先には珍らしい陽氣の冷たい日で、三人の中の二人までは、インパネスを着てゐた。三人の姿は、新緑をつけたばかりの枸橘垣に添うて見えたり、貝殻の白くついたしび垣に添うて見えたりした。スナフロ旅館とした看板をかけた怪しい家の門の外にも見えた。新緑をつたけ樺の高い梢も、ぢつと三人の姿を見下してゐた。不規則に曲りくねつた道の其所此所には、花の散つたばかりの吉野櫻の木も立つてゐた。色のおされたやうな八重櫻の花が、垣根の雑木の中に、首を垂れて咲いてゐる所もあつた。

三人の重々しい口からは、時とすると冗談が漏れた。「いよく不良老年が出来ましたね、」と何人か云つたので、三人は笑ひ顔になつた。

三人は二週間ばかり前から、この町に来て、ある調物をしてゐた。三人の宿にしてゐる家は、茶座敷風に建てた二階家で、下の座敷には、爐が切つてあつた。其處には一間の平床があつて、

古い古い曼陀羅の軸が懸かつてゐた。一體に狭つこましい感じのする家で、屋根はそぎ葺であつた。飛石を三つ四つ置いた庭先には、二三本の若い楓の木があつて、その枝が庭の三分の一を被うてゐた。晴れた日には、ぱつと照らした陽の光が、その若葉のそよぎにチラ／＼亂れて、細かな砂を敷いた地べたに美しい綺をつくつたが、雨や曇の日には、それが爲に陰鬱を増した。丁度楓の花の頃で、午後の微風に粉のやうな薄赤い花が散つた。稚松も二三本あつた。松の下には石燈籠が置いてあつた。小さな淺黄の傘をさした様な蕨の葉が、楓の根本や飛石の傍に見えて居た。

三人の姿は海岸を通つてゐる電車の内に見えた。乗客は少なかつた。三人の内一人は海の方を脊にして腰をかけ、二人は夫れに向ひ合つてゐた。海の方を脊にしてゐるのは、山田さんと云つて、もう四十五六になる男で、その人の口からは、好く漢詩の微吟が漏れた。向合つた二人の中の右にゐるのが水野さんで、それは山田さんから三つばかりの弟である。二人とも度の強い近眼鏡をかけてゐた。水野さんと並んでゐるのは、インパネスを着ない方で、それは岡本さんと云つてゐた。岡本さんは、水野さんから見ると、七つばかりの弟であつた。

暗い海の水は、線路に添うた屋根の上にも見え、松並木の間からも見へた。牡蠣殻などを置き

た小家も眼に付いた。小さな停留場に建てた旅館の看板に、女優髭にした若い二人の姿を書いてあるのを見た水野さんは、岡本さんに注意して、「うまいもんだね。」と云つて指をさした。山田さんはと見ると「ステツキの上に顎を載せるやうにして、前屈になつて眼をつむつてゐた。

「電車が遅いと思ひませんか、」と、水野さんは子供供した顔を向けて、岡本さんを見て笑つた。「さうですな、軍鶏は失禮ですからね、」と、岡本さんも笑ひながら頷いてみせた。

水野さんの頭に或る一瞬の光景が浮んだ。それは白くテラテラと光る日であつた。晝飯のあとで、三人は何時ものやうに散歩に出て、海岸へ行つてみた。

薄濁のした引潮の入江には、皺のやうな波があるばかりで、靜かな、心のどんよりとするやうな日であつた。沖の方をみると、蘆荻洲のやうに散ばつた海苔しびの垣を水平線にして、大きな三本櫓の汽船がどつしりとした圖體をみせてゐた。薄霧がその背景になつて、晴れた日には好く見える海に向ふの山の影は、すこしも見えなかつた。

三人は海岸をブラ／＼歩いてゐた。三人の眼の前には、若々しい幻の窓が開いて、その中の方が見えるやうな氣持になつてゐた。海岸の電車は、何時の間にかその三人を乗せて、隣町まで運

んで行つた。

隣町といふのは、もと海道筋になつてゐた所で、電車は町の中程に當る裏の田甫の中に停まつた。其處には前日からやつてゐる巡業の大相撲があつた。停車場に並んだ空地が相撲場になつて、うす汚れた大きな幕を引廻はしてゐた。入口には、二十間位もある高い足代を構へて、その上の人寄せの太鼓をドン／＼と鳴らしてゐた。その前で力士の弟子らしい太つた少年が、自転車の稽古をしてゐた。相撲場に降つた畑には、菜種の花が黄色く咲いてゐるのに、明るい陽がさして居た。

三人は町に這入つて、或種の家のある方角を探り探りして歩いた。はじめは東西に續いた田舎町の本通を西に向つて歩いて居たが、煙草店で聞いて東に引返へした。そして町はづれが近くなつた所で、雛妓のやうな風をした少女を乗せた車が来て、三人を追ひ越して左に折れて行つた。

「あつちだ、あつちだ。」と、水野さんはその車の後を見ながら云つた。

三人も折れて行つた。小さな飲食店が五六軒見えた。岡本さんは、一軒の飲食店の納簾に、「日の本バー」と書いてあるのを見て笑つた。三人の前に廓の四方を取廻はした板塀の片隅が見えた。女の車は直ぐ眼の前で右に折れて消えた。廓の門口であつた。風雨で黒ずんだ大きな門の左右に

は、ひよろ長い柳の枝が垂れてゐた。「見返り柳があるな」と、水野さんがいかつい幹を見上げて云つた。門の中には、二十軒ばかりの女郎屋が向合つてゐた。前の廣場には松や櫻や柳の並木があつた。門の正面は、町の裏通りになつて、小路に添うて棟割長屋が建つてゐた。長屋の右はづれから青々とした田甫が見えた。何處かで雲雀がビィ／＼鳴いた。

三十分の後、三人の姿を右側の取付の家の二階に見た。其處は行き詰りになつた室で、庭に澤山植ゑた赤松の枝越しに見ると、向ひの女郎屋が見え、片方からは大門の外の通りが見えた。山田さんが向ひの女郎屋の見える方を背にして坐り、水野さんが外の通りの見える方を背にして坐り、岡本さんは、水野さんに向ひ合つて坐つてゐた。山田さんの前の空いてゐる所へ、肥つた小母さんが来て坐つた。小母さんの後の廊下には、長いだんだらの模様のある座敷着を着た若い三人の女が蹲まつてゐた。

夕方になつて歸る時、隔ての襖は何人が開けるともなしに開け放された。三人とも三疊ばかりの座敷に順々に坐つて居た。薄い夜具には、洗ひ晒した白木綿の布ふがかけてあつた。「入院室だな」と、岡本さんは獨りで笑つてゐた。女の赤いメリヤスの襦袢の振に、二所ばかりはぎの入れ

てあつた事も岡本さんの眼についてゐた。

山田さんが床の上に座つて、敷島に火をつけてゐると、山田さんの女が這入つて来て、「軍鶏のやうに、ひねりッばなしでは厭ですよ」と軽く云つて、山田さんの巾の狭い燵かまどだやうな顔を覗き込むやうにした。

岡本さんは、その室に這入つて来て、山田さんから貰つたミルクキャラメルを頬ばつて口をモグ／＼させながら、竹の櫃子格子にしてガラス戸を入れた窓に添うて立つてゐたが、「ひねりッばなしは不都合だ」と、につと笑つた。窓の下は僅ばかりの畑になつて、雑草に交つて菜の花がほつ／＼咲いてゐた。畑の先は郎の塀になつて、塀の外の道の向ふ側の家の軒から上に、傾いた春の夕陽がうす赤く光つてゐた。

「左様よ」と、山田さんの女は、小さな小締のした顔をあけて、岡本さんを見上げて、「だから近い中に三人でお出なさいよ、あとは、此の人は一人で来るわ」と云つて笑つた。……

三人は電車を下りて歩いた。前日來た時に相撲場となつてゐた所は、もう綺麗に取拂はれてゐた。山田さんと水野さんは、その片隅で用を足した。

町の表通りに行つた所で、三人連の警官が泥濘の中を通つて、三人の行く方に行つた。中の一人は警部らしい肥つた男であつた。

三人は前日の目印を目當にして、直ぐ左側の宿屋の横を折れて、裏通りに出た。其所にはお寺の根橋垣があり、小溝などがあつた。長屋のある所はわけて泥濘がひどかつた。駒下駄を履いてゐる岡本さんは、右に寄つたり、左に寄つたりして歩いた。時々は立止つて、袂から反古紙を出して下駄の泥を拭いた。廣い田圃の其所此處には、簀笠をつけた人が鍬を動かしてゐるのが見えた。

本通を横切つて流れて来た小川があつて、石橋がかゝつてゐた。それを渡ると、遊廓の大門が直ぐ前に見えた。ふと見ると、町に這入つた時に見かけた三人の警官の黒い姿がその大門口に見えた。門の外にも五六人の人が立つて内の方を見てゐる。近くの長屋の口にも、其所所に人が立つて、何か事あり相に遊廓の方に眼をやつゐる。

空は益々暗くなつて今にも雨が落ちて来さうに思はれた。「あ、今の巡査だ、」と山田さんが云つた。

「何かあるんぢやないか、」と、岡本さんも云つた。

警官は大門の内へ這入つて行つた。後からも二三人随いて行くのが見える。

「何かある、廢さう、」と、山田さんは考へ深さうな目付をして立ち止つた。

水野さんと岡本さんの足は、本能的に早くなつた。

山田さんは、水野さんと岡本さんに引ずられるやうにして、又少し歩いたが、「歸ろ、歸ろ、」と云つて二人を呼びかへさうとした。

警官は、前日三人の登つた家へ這入りかけた。その前の並木の所にも、十二三人の人が散ばつて、その家を覗いてゐた。大門の外の人とその家の方を見てゐる。

「彼の家だ、彼の家だ、」と、岡本さんは胸を騒がしながら、山田さんの方を振返つて云つた。水野さんはその間にすん／＼前に行つた。山田さんは、ステッキをあけて招いてゐる。

岡本さんが、氣がついて見ると、傍に長屋のお神さんが立つてゐる。「何かあつたんですか、」と聞いてみた。

「無理心があつたんですつて、」と、お神さんは、遊廓の方を見い見いして云つた。

岡本さんの頭に、生々した血が閃めいた。岡本さんは顔色を代へて、山田さんの方を見て、「心中ださうです」と、吃りながら云つた。

山田さんは二つ三つ頷いて、くると背後向になつて歩き出した。

岡本さんは、泥濘もかまはずに水野さんの後を追つかけて行つた。水野さんは、大門の左側の口に行つて、其處にも二三人立つて覗くやうにしてゐる人々の傍で立ち止まつた。

岡本さんは、大門に近い長屋の軒下へ立つて、庭に立つて手拭で赤い顔を拭いてゐる車夫らしい男に、「何かあつたんですか」と聞いた。

「何かあつたんですかね」と、車夫は白々しい顔をして、岡本さんの顔をじろく見した。岡本さんは直ぐお出入りの車夫だから云はないのだなと思つた。で、急いで水野さんの傍へ行つた。

警官の姿はもう見えなかつた。空気が地べたも、一體雨氣をふくんで、暗くしつとりして見えた。大門の入口の柳の緑も、重さうに垂れてゐた。岡本さんは水野さんの前に立つてゐる四十前後の皮の厚さうな男の横顔をみてるたが、心の底では、自分の知つてゐる女でなければ好いがと思つてゐた。

「心中したのは、どうした人ですか、」

「——町の皮屋の亭主ださうです。」

「女は何人ですか、」

「榮山……」

榮山とは水野さんか山田さんかの敵娼にした女であつたが、自分の女でなかつたので、岡本さんは何んだか心が軽くなつたやうな氣持がした。それでも胸は騒いだ。「薄情の仕方だ、」などと云つて話し合つてゐる人の言葉を斷續に耳に入れながら引返してくると、水野さんも隨いて來た。

「榮山は何人ですかね、」と、岡本さんが振向いた。

「僕のだ、僕のだ、」と、水野さんが苦笑とも何とも云へない顔をした。

「左様ですか、世の中には妙な事があるものですね、」と、岡本さんは云ひ云ひして歩いた。暗い影が岡本さんの眼の前にあつた。

山田さんは石橋の傍に衝立つてゐた。三人は一所になつて小川の流に隨いて歩き出した。土手を柔かに包んだ草の中には、蒲公英の花も咲いてゐた。三人の中で、一番年下の岡本さんは、

何だか物足りなさうにしてゐるが、山田さんと水野さんは、もう分別のある家長の氣持になつてゐた。

「もうこれで一念發起するさ。」と、山田さんは洋杖で草の上を軽く叩きながら歩いた。

怪

僧

官軍の隊士飯山某は、五六人の部下を伴れ、勝沼在の村から村へかけて、潜伏してゐる幕兵を捜索してゐた。それは、東山道から攻めのほつた官軍を支へやうとした幕兵を一戦に破つた跡の事であつた。

夕方になつて唯ある森の蔭に小さな寺を見付けた。飯田はその寺で一泊する積りで、夕陽の光を浴びて、寺の方へと行つた。山門の柱も朽ちて荒れた寺であつた。鐘樓には釣鐘も見えなかつた。

部下の一人は銃を引きするやうに持つて、先づ案内を請ひにも行つたので、飯田は山門の口に立つて待つてゐた。暫く待つてゐても部下は歸つて來なかつた。で、他の一人が見に行つたが、間もなく初の部下と十所に何か去ひ去ひ歸つて來た。

「いくら玄關から聲をかけても返辭をしないから、庭の方へ廻つてみると、一人の坊主が若い女とべちやべちや話して居るから、一泊したいと云ふと、困ると云ふから、一嚇し嚇して泊るやうにして來ました。彼奴一癖ある奴でございます。」と、部下が云つた。飯田は微笑しながらそれを聞きながして這入つた。部下は、~~……~~所に行つた。

狭い玄關口には、大きな色の白い僧が坐つてゐた。

「今晚は御厄介にあづかります。」

飯田は鷹揚に云つた。僧は輕薄な笑を顔に浮べてゐた。

「お勤め御苦勞に存じます。見らるゝ通りの荒寺で、茶も椀々おあけする事も出来ませんが、それで宜しければ、ゆつくり御逗留なさいませうに。」

「なに、糧米の用意もある、今晚一晩御厄介になれば、明日は直ぐ出發します。」

その内に部下が厨の方から手桶に水を入れて持つて來たので、飯田は草鞋を解いて、それで足を洗つてあがると、僧は後から來て、次の室へ案内した。塵の溜つた狭い室であつた。

「甚だ穢い所で、お氣の毒でございます。」

かう云つて僧が出て行くと、飯田は刀を取り、陣笠を脱いで、だんぶくろを穿いた體を疊の上に置いた。部下は炊事にかゝつたのかあがつて來なかつた。

軽い足音がして、何人かがやつて來た。今の僧にしては足音が違つてゐるなと思つて、飯田は顔をあげた。若い女が茶を持つて來た所であつた。飯田は驚いた。それは甲府の町に居る善の妻

ではないか。彼は一昨年甲府を脱走して京都に入り、勤王の士と往来してゐる内に、鳥羽伏見の役となり、それから討幕の軍が起つたので、彼も土佐藩の手に付いて故郷に來たものの、幕兵との戦があつた爲めに、甲府の町に行く事も出来なかつたが、二三日の内には隙を見て、妻を訪はうと心算に喜んでゐる所であつた。彼は手にしてゐる鐵扇を取り落とさうとして、氣が付いた。

女は澄してその前に來て、靜に茶を置いた。面長な濃艶な頬から鼻にかけて、生々とした見覚えがあつたが、女が餘り澄ましてゐるので、若しや人違ではないかと思つて、かけやうとした言葉を抑へた。女は兩手を突いて、うやうやしく俯向いた。白いその首筋から細そりした肩のあたりにも見覚えがあつた。右の耳の下には何時も見てゐる小さな黒子さへあつた。

「お前さんは、お高じやないか、」

女は顔をあげたが、冷かな顔をしてゐた。

「さうではありません、」

飯田は不審でたまらなかつた。

「お前さんは、私の顔に見覚えはないのか、」

「ありません。」

かう云つて、女は不氣味さうにして、そそくさと出て行つた。飯田は呆然としてその後を見送つてゐた。

厨の方が急に騒がしくなつた。飯田は氣が付いて、片手を刀にかけた。と、周章しい足音がして部下の一人が草鞋のまゝ飛んで來た。

「厨の隅に生血の付いた脚絆があつたから、坊主を押へて詮議をしようとする、坊主が逃げ出したから、押へて繩をかけました。」

「女はどうした。」

「あれも逃げやうとしますから、一所に繩をかけました。」

飯田は二人に繩をかけたを幸にして、女の詮議もしてやらうと思つた。彼は刀を持つて部下と一所に玄關口へ出た。僧と女とを縛りあけて玄關の柱に繋いであつた。

「住持、變つた姿を見て氣の毒ぢやが、どうしてその方はかうした姿になられた。」

飯田は縛られたなりに悄然と立つてゐる僧を見おろして云つた。その傍に女も首を垂れて立つ

てゐた。

「昨夜幕府の脱走兵が五六人來て、私を嚇して泊つて行きましたが、その脚絆の一つが残つて居りました爲めに、お疑ひを受けました。」

と、僧は顫ひながら云つた。飯田は女の右の二の腕の腫物の痕を見たかつた。

「よし、さうか、それぢや大した罪でない。それは好いとして、その女の右の二の腕を見せてくれ。」

飯田は傍に立つてゐる部下の一人に云つた。僧はそれを聞くと、びくとしたやうにして俯向いた。飯田はそれをちらと見た。部下は女の後手にせられた右の手に自分の手をかけて、二の腕にかゝつた袖を捲つた。黒い小さな爪形の傷痕があつた。

「よし、分つた。その僧を打ち据ゑろ、女の事に付いて何か白狀させろ。」

と、飯田が云つた。玄關口に腰をかけてゐた部下は、手にしてゐた銃を持つて僧の傍へ行つて、その臺尻で背を撲りつけた。

「白狀しろ。」

僧は苦痛を忍へてゐるが、やがて倒れかけた。この拍子に俯向いて、うつとりなつてゐた女が顔をあげて、きよろ／＼してゐるが、やがてはつちりと眼をあげたやうにして、四方を見廻はし、そして飯田の顔を見ると、

「あなたは、」

と、叫んで涙を流した。飯田は確に妻の聲を聞いたのであつた。飯田はおりて行つた。

「お前はお高じやないか、」

女は前に來た飯田に顔を差し出して、その胸にすがるやうにした。

「お前は どうして此所へ來た。」

女は又きよろ／＼と四邊を見た。僧は軍士に撲られて倒れてゐた。

「此所は何處で御座いませう、私は どうして居ります。」

「お前は勝沼在の寺にゐる。どうした、この様は、」

女は大きな呼吸を吐いた。

「私は、家にゐると、ある日、背の高い坊主が來て、私を睨んだ事を覚えて居りますが、それが

らは、何をしてゐたやらさつぱり分りません。』

飯田は奇怪な思と、不快な思とに精神が錯亂しようとした。部下は急いで女の繩を解いた。女は飯田に取りすがつて泣いた。

妖僧は二三日して、勝沼の官軍の手で誅せられたが、その官軍の隊士の中には、もう飯田の姿は見えなかつた。

南國の印象

○
四時になつても雨雲の深い爲に黎明の光は見えなかつた。列車はその中を喘ぎ喘ぎ呼吸苦しい疾走を續けてゐた。私と桂月翁とは、食堂の腰かけに並んで酒を喫んでゐた。

『土佐はこれから松魚の時季ですね、』と、私は翁に向つてもう二三度云つた事を又云つた。

『さうかね、』と、翁も初めて聞くやうな顔をして頷付いた。

いつの間にか正宗の塚が空になつてゐた。

『もう一本取らうか、』と、翁が空塚を振つてみせた。

『私はウ井スキーにしませうか、』と、私が云つた。

『さうだ、ウ井スキーが好いね、ウ井スキーにしようか、』と、翁も同意した。

私は體をそらして、厨夫室の方を見て聲をかけた。

『もう食堂をしまひましたから、』と、厨夫室の戸が半ば開いて、厨夫の一人が顔を出した。

二人は朝の食堂の初まるまで待つ事にして話し出した。話題は皆土佐の話であつた。三十八年振りに初めて故郷の土佐へ歸省しようとしてゐる桂月翁は、子供子供した顔をして膝かひな土佐の

記憶を話した。

靴の音がして厨夫の一人が来て、二人の背後に立つた。『朝飯の構へがありますから、出て下さい。』

二人は苦笑し合つて自分の席へ歸つた。旅客の一杯になつた三等室の腰かけには、翁の姉さんと、夫人とが睡りこけてゐた。

『食堂が開いたら、一番に行かう、』と、翁が煙草をつけながら云つた。

車窓の外は薄明るくなつてゐた。あはたどしい睡りから醒めた旅客は、とんがった頭をもつ立てはじめた。口を一杯に開けて欠伸をするお神さんもあつた。

厨夫が来て朝食のピラを配り出した、翁と私とは、走るやうに食堂に這入つて行つた。一人の肥つた男が来て、もう味噌汁の椀を手にしてゐた。

二人は正宗の二合塚を云ひつけて、それの温まるのを待つてゐた。列車は名古屋驛に着かうとする所であつた。(五月十一日)

吉野川の流に沿うて、巖壁を切り開いて造つた國道の上には、私等に乗せた四臺の車が走つてゐた。車にはそれそれ前曳の犬が付けてあつた。

兵庫から汽船に乗つて、前日の朝早く徳島に着いた一行は、池田まで汽車に乗り、その夜は白地の奥にある雲邊寺で一泊して、朝の十時頃再び白地に歸り、其所から高知へまでの車を雇うた所であつた。

夕方雲邊寺へ着いた時から降り出して、山を下る時まで降つてゐた雨は、もう止むには止んでゐるが、狭い谷間の空には、鼠色の雲がいそがしうに飛んで、おりおり霧のやうな物が降つて來た。私等は車の上から、兩岸に重なり重なりした脹みのある山脈が、眼も遙に頂上近くまで耕されて、それが多くは麥畑になつてゐる姿を眺めた。畑の間には五軒三軒と草葺の家が、南畫の趣をして飛々に立つてゐた。

白地から穴内まで、國道は河の左岸に通じてゐた。國道に沿うて山村の部落が其所此所に小街をなしてゐた。そのあたりは池田の煙草專賣局の管下になつてゐるので、人家に近い崖上の畑には、煙草の苗が植ゑてあつた。

大歩危、小歩危と呼ぶ所が國道筋にあつた。其所は舊道の時の難所で、今でもそのあたりは、脹みのあつた山が削り立てたやうに絶壁になつて、流の上におつかぶさつてゐた。小歩危は川口と云ふ町を離れると直ぐであつた。小歩危の間は八町ばかりあつた。吉野川はそのあたりから趣を呈して來た。小歩危から一里ばかり行くと、大歩危になつた。大歩危の間は二十三町と云はれて、少しの間は舟が通ふてゐるので、大歩危の入口で車からおりて、其所の茶店の亭主に頼んで、持舟に載せて貰つた。

種々な形をした玄武岩のやうな岩が、水の中に衝立つて、水が激んで淵のやうになつてゐる所を、四人を載せた小舟は漕ぎ登つた。縁におほはれた兩岸の岩石は、危く頭の上に落ちかゝりさうな氣配をしてゐた。

「こんな日には、猿の群が見えます。」と、茶店の亭主は云つた。

舟から上つて、赤野と云ふ所で晝飯を喫つてゐると、二時過ぎになつた。其所は阿波の三好郡三名村の中で、土佐境に近い所であつた。

四時になつて一行は土佐の長岡郡西豊永村の中の大田口と云ふ所に着いた。寺内の薬師と云ふ

日本三薬師の一つと云はれた有名な薬師があるので、車からおりて八町位ある山坂を登つて行つた。薬師堂は夕陽の赤々と射した杉の森の中にあつて、堂の傍には小學校があつた。その小學校には岡本丞と云ふ私の友達の一人が校長をしてゐるので、私はその友達に逢ふ積りで、皆より一足先に登つて學校へ行つた。

生徒の歸つた後の學校は、ひっそりとして、教室には雨戸が締まり、右側の教員室らしい所だけ開いてゐた。寛い額の禿けあがつた友達は、一人その室に残つて、明日の教材であらう、小さな黒板へ何か書いてゐた。

『や、』と云つて、友達は夢見るやうな顔をして私を見た。

『桂月翁と一所に土佐へ来て、お薬師様を見に寄つた。』と、私は友達の進めた椅子の縁を撫でながら云つた。

二人は學校を出たが、友達は堂守の僧に交渉して内部を參觀させてやらうと云つて、學校の隣の家へ這入つて行つた。私は堂の前へ行つて、桂月翁と一所になつてゐた。堂の鍵を持つて少平を連れて友達が間もなくやつて来た。私は友達を桂月翁に引き合はせた。

堂の中は夕暮のやうに暗かつた。薬師は國寶となつてゐるので、古い御寶で圍つて見る事は出来なかつたが、この頃修繕をする爲に出したと云つて、仁王と四天王とは、堂の横手の臺の上に置いてあつた。薬師の背後につけた御光の波形と云ふ物も傍にあつた。其所に柿色の衣を著た堂守の僧が来て、波形の説明などしてくれた。

友達と堂守とに別れて、國道におりて見ると、もう陽が落ちてゐた。そのあたりの旅館から意を受けたらしい車夫は、頗に此所で泊つてはどうかと云つたが、翌日は本山町に行つて、野中兼山の遺跡を見る事になつてゐたので、ぜひ杉へまで行けと云つて、又車に乗つた。

大田口から一里半位行くと、國道は吉野川の本流に別れて穴内川と云ふ支流に沿うて行つた。もう其所は東本山と云ふ村になつてゐた。本流の上には新しく出来た鐵橋が架つた。車はその上を通つた。その本流から一里上流になつた川口と云ふ所で、十二三年前、小學校の教師をしてゐた私は、その當時の事を思ひ浮べながら、薄暗い四方の景色に眼をやつてゐた。時折教員會をした事のある穴内の小學校も、依然として穴内の人家はづれにあるのが見えた。

車の上は風が寒かつた。杉へ著いたのは、八時を過ぎてゐた。杉は東本山村の中心地で、日和

佐屋と云ふ國道筋では第一とせられてゐる旅館があつた。長く店にゐる店員の一人は、川口小學校の教師であつた私を知つてゐた。私は郵便局へ行つて、東京や高知の方へ電報を打つた。學校の暇々に私が日本外史を教へてやつた郵便局の二番目の息子は、鼻下に薄く髭を生やして事務を執つてゐるが、私を忘れてゐた。

『宮内駒衛君は、矢張り役場の方で起居して居るだらうか、』と、私は聞いてみた。それは私が川口小學校にゐる時の校長で、學校の方が休職になると共に、村役場の小使となつてゐる友達であつた。私は東京を出る時から、その善良な酒好の友達に逢ふのを楽しみにしてゐた。

『宮内さんは今晚役場の組と一所に××屋で飲んで居りましたが、まだ居りませう、』と、若い事務員が云つた。

私は旅館に一度歸つてから出かけて行つた。桂月翁は女中を膳の前に置いて、お説法をしながら鳥が羽ばたきをするやうに、兩手で膝をばたばたとやつて笑つてゐた。

××屋に這入つて行くと、庭に蹲んで靴を履かうとしてゐる洋服の男があつた。それは矢張り川口の者で久保倫と云ふ教員をしてゐる友達であつた。二人が庭に立つて話してゐると、女中の

知らせによつて宮内君がおりて來た。小柄な老人の善良な眼の光を見ると、私の肉體はぞくぞくとして眼のうるむのを感じた。

別室で三人が盃を持つた所へ、矢張り役場の組と別室で飲んでゐた門脇恒實君が來た。それは私が川口にゐる時の収入役で、今は村長になつてゐる友達であつた。二十一日の月給日になると私と宮内君とは、生徒を晝から歸して置いて、二人で山を越へて役場へ行つた。そして月給を受け取ると、杉へ廻つて飲んで歸つた昔話などが一座を賑はした。生徒に酒を買はしにやつて、教員室でそれを喫んで、好い心地に酔つて來ると、學校を休みにして生徒を歸した話も出た。

『今は、そんな亂暴な先生は無くなつた。』と云つて、村長は二本の前歯を見せて淋しさうに笑つた。

一時過ぎまで飲んで、門脇君が歸つて行くと、三人が一所になつてごろ寝をした。

『久しぶりぢやないか、』と云つて、私は片足を宮内君の足の上に乗せてみた。(五月十三日)

朝の十時頃、高知市の農人町の岸を離れた屋根船の中には桂月翁、土陽新聞記者の山崎在君、

高知新聞記者の竹内英省君、及び兩新聞社の寫眞版係、それから私と、私の妹の亭主になる坂井寅吉君との七人がゐた。靜かな堀割の水の上には、春雨に似た霧のやうな雨が降つてゐた。その日は舊曆の灌佛の日であつた。浦戸港内の入江に沿うて長濱村の雪蹊寺で灌佛をやると共に、その並びの秦神社にある長曾我部元親の本像の拜觀を許す事になつてゐるので、桂月翁はそれに行く所であつた。

船の中には酒と重箱に盛つた肴とが置いてあつた。桂月翁はコップを手にしてゐた。船は堀割を出て、市街の南を流れた鏡川の裾を横切つて入江に出た。左に五臺山の丘陵が和らかな線をして、縁のしたたる姿を入江の上に見せてゐた。そして五臺山の左の端には、舟入川の流れがあつて、その上には、長い長い青柳橋と云ふ橋が墨繪のやうに架つてゐた。入江の右には筆山と云はれた潮江山の丘陵がなだらかに連つてゐた。桂月翁はさも感慨に堪へないと云ふやうな眼付をして見入つてゐた。

入江の兩岸に連つた丘陵が突き出て來て海峡のやうになつた所へ行つた。其所は孕はらと云ふ所で右の方の入江の水の入り込んだ所には、土佐航路の汽船の發着所があつた。丘陵の麓にはセメン

ト會社の工場があつて、數本の黒い大煙突に霧雨が絡み付いてゐた。船は孕を過ぎて左岸に沿うて漕いで行つた。船の舳の方には、平坦な一幅の土地がほんやりと見えてゐた。三里村の内の仁井田と云ふ私の故郷であつた。

船は仁井田の海岸に一時間ばかりゐて、私の友達で村の村長をしてゐる北川喜久馬君と、早川齊君の二人を積み増して、岸に沿うて西へ西へと行つた。麥の黄ろに熟した畑があつたり、小さな造船所があつたりした。スマントを建てかけた木造汽船が雨に淋しさうに雨に濡れてゐる所もあつた。私の叔父の家の造船所には、五百トン位の木造船が一艘造られてゐた。私も小年の日を其所で五年間暮らしてゐた。

村の西はづれは、浦戸港の咽喉になつてゐた。其所は種崎と云ふ部落で、人家がぎつしり並んでゐた。前岸へ渡る渡船や、高知市に往來する巡行船の發着所があつた。巡行船の發着所には小さな棧橋があつた。棧橋の上には、中島壽馬と云ふ友達の一人が待つてゐた。船はその友達をも乗せて、前岸になつた長濱村へと行つた。

長濱川と云ふ小さな川が前岸の山の陰を流れてゐた。船はその川を漕ぎ登つて、長濱の人家の

ある所に著いた。雪蹊寺へは五六町あつた。

雪蹊寺の境内と秦神社の境内とは、申譯ばかりに設けた低い土手で支切られてゐた。雪蹊寺は元親の菩提寺で、木像もその中に安置せられてゐたが、明治になつて神佛の混合を禁ぜられてから、木像を秦神社として祭つたものであつた。境内には葉櫻の緑が重い蔭を作つて、その下から雪蹊寺の座敷が見透かされた。この座敷には十二三人の者がゐた。それは長濱村の有志が桂月翁を待つてゐる所であつた。横川久衛と云ふ私の友達の一人は、私の姿を付けて土手を越えてやつて来た。

秦神社には、二三人の神官が装束をつけて坐つてゐた。その中の一人は私の知つてゐる男であつた。木像は拜殿の後の一段高い堂の中にあつた。髻の白い年老つた神官が御簀を捲く綱を持つて控へてゐた。桂月翁と私とがその前に跪坐くと、神官は靜に御簀を捲いた。元親の子の盛親が刻ましたと云ふ生々した木像があらはれた。それは束帯して坐つてゐる姿であつた。

拜觀が済むと、一行は雪蹊寺へ迎へられた。桂月翁の揮毫がはじまつた。揮毫が終ると酒になつた。

八時頃になつて雪蹊寺の一行は、種崎へ渡つた。寺を出る時見ると、境内には露店などが出来て賑つてゐた。寺の本堂には花のやうな蠟燭をつけてあつた。茶色の釋迦像を置いた槽は、本堂の前にあつた。

暗い入江の水を渡つた一行は、桃花亭と云ふ料理店にあがつた。座敷の明りが足りないので、蠟燭を碁盤の四隅の尻に立てたりした。(五月十七日)

○

高知市に著いた桂月翁は、その親戚に當る市内鷹匠町の小澤金之助氏の許と、市外の下知村に居る濱田楠猪氏の許とを往來して、その二軒に足を止めて居た。小澤氏は商工學校の校長で、濱田氏は休職の陸軍中佐であつた。その小澤氏の所へは、翁の一番上の姉さんの娘が嫁いでゐて、その姉さんも其所にゐたので、久しぶりで兄弟三人が顔を合せる事が出来た。香美郡の手結と云ふ所にも、翁の腹違の妹が一人ゐたので、皆でそれを尋ねた事もあつた。その妹の娘で市内へ嫁いで來てゐる若い女は、一二度私も逢つた事があつた。

翁の一行が香美郡の立田村と云ふ所に行つた時には、私もその女も同伴した。老いくすんだ一

行の中に、その女は雑木の中の白百合のやうに白い水々した顔を見せてゐた。その日一行を乗せた電車は、細かな雨に濡れて、稻を植えたばかりの水田の間を走つた。人家のある所には、橋の花が紫絞の幕を張つたやうに見えた。「某さん」と云つて、桂月翁はこの女を我が子のやうに可愛がつた。翁が酔つて怪しい手つきをしながら話をはじめると、この女は白い齒をあらはして艶かに笑つた。(五月二十六日)

市街を眼下に見おろす高知公園の崖際の料理屋で、桂月翁と私とは晝飯の馳走になつてゐた。それは高知新聞にゐる友達の楠瀬如龍君から招待せられたものであつた。

五月の高知市は、緑の壓迫の中にあつた。麥くらひと云ふ梅雨の先打ちのやうな細かな雨が欄干の先に見えてゐた。杜鵑が思ひ出したやうに鳴いた。行々子が小澤の竹垣に来て鳴く事を思ひ出した桂月翁は、「土佐の行々子は横著だね」と云つて笑つた。

その日、午前中に縣立の女學校の女生徒を集めて講演した翁は、午後一時から公園下にある公會堂に男學生を集めて講演して、六時から縣人の招待會に臨む事になつてゐた。

楠瀬君は電話で五六人の同僚を呼んで、座を賑やがにしてくれた。飯がすむと桂月翁は揮毫をさせられた。(五月十九日)

朝霧が銹鐵色をした澤の水の上に漂うてゐた。廊下に立つて、見るともなしに見ると、澤の手前の岸に一人の男が蹲んで、釣竿を投げてゐた。澤の向ふを見ると、小さな堀割の水が見えて、その口に土橋が架り、橋の右側の袂には、一株の樗の木があつた。樗の下には社らしい小さな祠も見えた。澤の周圍は、短い稻の植つた水田で、遙かの前には、一簇の人家を乗せた土手があつた。人家の屋根の上には、五臺山の一方の線が出てゐた。

私は酒の残つてゐる頭をうつりとさせて廊下に立つてゐた。「夜が明けたね」と云つて、耳もとで云ふ聲がした。これは昨日から私と一所になつてゐる坂本要吉君であつた。坂本君は私の幼な友達であつた。坂本君の背後には、白い女の顔があつた。

二人は間もなく車に乗つて、清柳橋を渡り、五臺山の麓を廻つて、下田川の岸に折れて行つた。其所には鳴谷と云ふ部落があつて、坂本君の姉さんの嫁いてゐる小兒科で有名な醫師があつた。

二人の車はその前に停つた。

若い男が門口で新聞を呼んでゐた。それは其所の女婚であつた。庭には一株の大きな柿の木があつて、その幹に一疋の猿を鎖で繋いであつた。

主人の大野養順氏は、數日來の酒で頭があらがないとの事であつたが、私等の爲に設けてくれた酒がはづんで來ると、赤い童顔を見せに來た。私を敵手にして箸奪も一二回打つた。酒を飲んでゐる所は診察室であつた。門口の右側になつた患者控室に來てゐた子供を負つた婦人達は、庭越しに忌々しさうな眼付を見せてゐた。(五月二十三日)

○
屋根船の中に坐つてゐる者は、首を傾けたり、頬に片手を當てたりして、一心になつて考へてゐた。船が孕に行くまでに『夏の月』で二句作らねばならなかつた。何人も盃に手をやる者はなかつた。

船は夕暮の入江の上を靜に進んで行つた。臈會と云ふ醫師のこしらへた俳句の會が主催して、桂月翁と私の爲に、桂濱行をやつてゐる途中であつた。

私の傍には三味線を引く女が坐つてゐた。この女も句を考へたるた。私はその女が困るかどうかをためす爲に、空の盃を二三回差し出してみた。女は笑つて酒を注いだ。この女には鼓草と云ふ俳號があつた。彼は『夏の月歩みつかれてもどりけり』と云ふ句を得た。

孕が來たので皆が句を書いて出した。桂濱と云ふ人の『夏の月 櫓の櫓渦にとけて行く』の句が最高點となつた。桂月翁の『鬚長きうしろ姿や夏の月』と云ふ句が可成りの點であつた。

互選の中に陽が暮れて、薄曇のした空の満月に近い月が淡く光り出した。船の舳に釣した二つの提灯に火を入れた。私は自分の句を望まれて、二三枚の短冊に悪筆を揮つた。

十時頃になつて、船は港口の右岸になつた浦戸村へ著いた。桂濱はその南になつた龍頭岬の磯にあつた。一行は船からおりて、小さな坂を越して行つた。月は臈の光を投げてゐた。(五月二十二日)

○
桂濱行の翌日は、濱田中佐が主催で、桂月翁の爲に廻し打ちが催された。小松大佐、香取大佐、土陽新聞の松尾理事などが同船してゐた。それは前夜桂濱行をやつた屋根船であつた。その船へ

は、得月樓と云ふ料理店の若主人も三四人の若い女を伴れて乗った。

その日は入江の上に風があつて、屋根船は進まなかつた。孕へ行くと、先發してゐた十艘位の網舟の撒網を打つてゐるのが見え出した。撒網を持った漁師と船頭との二人が乗り込んだ小舟は、魚の居さうな場所を覗つて、二手に別れて薄ぎ寄せで行つて、順々に網を投じた。鱈や鰯などの小魚が澤山取れた。桂月翁はその網舟の一艘に乗り移つて、面白さうに見物してゐた。

盛に網を打つた所は、西孕と、巢山と云ふ島山との間であつた。屋根船はその時、巢山の磯へ船がかりしてゐた。料理人の乗り込んでゐる小形の屋根船もその傍にゐた。その船からは網で取つた魚を料理して持つて來た。北海道生れだと云ふ一人の女は、淋しい聲で追分を唄つて聞かせた。

三時頃になつて潮が満ちて來ると、網舟を歸して、一行は種崎へと向つた。種崎の南の海岸には、觀瀾閣と云ふ得月樓の別館があつた。其所は千松園と云ふ公園地になつた松林のはづれにあつた。一行を乗せた屋根船は、その下へ著いた。その時、隣の造船所では百トン位の木造船の進水式をやつた所で、磯には百人ばかりの人が、黄ろな手拭を鉢巻にして騒いでゐた。船の下に敷

いてあつた材木を水の中に這入つて拾つてゐる者もあつた。新造船には假柱を立て、萬國旗を引き渡してあつた。その船にも黄ろな鉢巻をした男が七八人乗つてゐた。

別館は鎖した儘で暫く何人も入れなかつたが、その日は桂月翁の爲に特別に開いたものであつた。芝の生へた蕭酒な庭には、晝顔の花が小紋を置いたやうに咲いてゐた。庭の先には低い土手を築いてあつた。私等はその土手を跨いで庭に這入つた。

別館では又一頻り酒がめぐつた。三人の若い女は、長い袖を翻して、胡蝶のやうに舞つた。

日が暮れかゝると、濱田、小松、香取、松尾の四君と一所に若い女達も歸つて行つた。その後、のひつそりした座敷で、桂月翁と、私と、若主人と、それから中島壽馬君の四人が夜遅くまで話してゐた。(五月二十二日)

○

一行は狭い山路を登つてゐた。それは桂月翁と、私と、若主人と、それかれ若主人の伴れてゐる一人の女とであつた。背後の方を見下ろすと、港口の潮が藍色に光つてゐた。頭の上には楊梅の枝が垂れて、葉がくれに青い豆のやうな實があつた。私はその實のなつた小さな枝を折つて桂

月翁にやつた。翁はそれを眼鏡の間に挿した。

四人は浦戸山の頂上にある長曾我部氏の城址に登つて行く所であつた。頂上は直ぐ来た。其所は丈け高い樹木が生ひ茂つて、眺望はなかつた。その中には白ペンキで塗つて氣象信號臺と、小さな社とが並んでゐた。社は城八幡と云つて城中に祭つてあつたものであつた。瓦盃に入れて白米が供へてあつた。桂月翁が先にそれを拜んだ。

信號臺の上には、小さな旗が微に動いてゐた。桂月翁がそれに掻きあがらうとしたが、酒に酔つてゐるのであがれなかつた。

『首尾好く相勤めましたなら、』と云つて私が笑つた。

翁は口惜しかつたのか、すつ裸になつて再び掻き上つたが、今度は旨くあがる事が出来た。翁は階段をのほつて旗の下へ行つた。

『こゝで見なければいけない、』と、翁は得意さうに云つた。

頂上をおりかけた所で、袴を履いた若い男がやつて来た。それは浦戸村の助役で、桂濱行の晩に提灯を點して一行の道案内をしてくれた山木富美雄君であつた。山本君と私とは舊知であつた。

その日も山本君は、私等のことを人傳に聞いて、道案内をしてくれる爲めに追つて来た所であつた。

一行は山を南に下りて、燈臺のある方へと行つた。浦戸山の脈が南に崩れて出来た龍頭岬は、その岬端が二つに割れてゐた。月の好いと云ふ桂濱は、その岬角の二つに割れて櫛形になつた所の磯を云ふのであつた。燈臺のある所は、右の岬角であつた。土佐灣の潮が眼の前に擴がつて見えた。

薄陽の射した小さな燈臺の周圍には、木柵が設けてあつた。一行の姿を見て犬が吠へ出した。燈臺守の小舎には、二人の男がゐた。

『月は山から出ますか、それとも海から出ますか、』と云つて、私は聞いて見た。私は桂濱の近くに生れながら、桂濱から見る月が海から登るか、土佐の東端になつた室戸岬の上の山から登るか注意してゐなかつた。

『二月頃の日の短い時は、室戸岬を離れて海の中から出ますが、普通は山から出ます。』と、燈臺守の一人は教へてくれた。

一行はそれより燈臺守に導かれて、燈臺の中へと這入つて行つた。(五月二十二日)

二人の客を乗せて、下田川を登つて行つた小舟は、吹井橋と云ふ小さな橋の袂に著いた。舟が著くと、客の二人はふらふらしながら陸にあがつた。その客の一人は、袖の紋付羽織を着て袴を履いてゐた。それは桂月翁であつた。他の一人は私であつた。二人は武市瑞山の墓に行く所であつた。

もう夕方であつた。空は氣味悪く曇つてゐた。二人は下田川の土手を離れて、田圃の中に通じた砂利を敷いた郡道に曲つて行つた。田圃の先には、低い丘陵が横はつて、村落の屋根が見えてゐた。瑞山の墓もその麓にあつた。道から左側に見える白壁の家は、坂本要吉君の住宅であつた。其所は吹井と云つて、矢張り私の村の中であつた。

笠を擔つた商人の五六人連れ立つて行くのを追ひ越して行つた。そして郡道から小徑に出て、岳陵の麓へとあがつて行つた。路傍に一軒の農家があつて、その門前の畑や崖際に植ゑた密柑の白い花は、高い香氣を放つてゐた。

瑞山の墓地は直ぐその上であつた。下段に自然石の記念碑を建て、昔の墓地とは面目を一新してゐるが、私は數日前、既に坂本君と來てゐるので、何の感じも起らなかつた。

二人がおりやうとした所で、坂本君がひよつこりやつて來た。

『どうして知つた。』と私が云ふと、『風がはりな人が二人歩いてゐたから、多分左様だらうと思つてやつて來た。』と、坂本君は云つた。

私は坂本君を桂月翁に引き合はした。坂本君はぜひ翁を同伴して寄つてくれと云つた。二人は八時までに濱田中佐の所へ行く約束があつたが、一寸寄る事にした。墓地の入口にあつた農家の一部は、瑞山の舊宅であつた。坂本君は二人を案内して、その家に這入つて行つた。古い草齋の棟が夕暮の光の下に、廢殘の色を一層濃くしてゐた。庭にも昔の儘だと云ふ小さな池があつて冷たい清水が湧いてゐた。

坂本君の家には立派な土蔵も納屋もあつて、村でも上農の部に屬してゐた。

『君の家なら御馳走になつても氣の毒にならない。』と、桂月翁が云つて笑つた。

二人は玄關の三疊で、冷たい酒を飲んだ。桂月翁は其所でも揮毫をやつた。(五月二十四日)

○ 高岡郡佐川町の裏手になつた光明寺山の墓地には、上村左川氏の墓があつた。左川氏の墓と並んで夫人の墓があつた。夫婦の墓の向ふ斜には、お父さんの墓もあつた。

前日、横倉山に登つて、川田豊太郎氏の許に一泊した桂月翁は、朝になつて左川氏の舊宅を訪ひ、それから家人と一所に墓参に行つた。私もその中に交つてゐた。

墓地には、二本の栗の木があつて、暑い朝陽をその枝でさへぎつてゐた。左川氏のお母さんの肥つた體は、墓地一杯になつて見えた。左川氏の令弟はとんがつた頭がつるりと禿けてゐた。紫色の銘仙の著物を著てゐた左川氏の中の娘と下の娘とは、二人とも揃つて美しかった。

○ 桂月翁は、地べたに手を付いて、地下の知己に挨拶した。私も左川氏には、明治三十六年の夏一度逢つた事があるので、桂月翁の後から禮拜した。(五月二十九日)

佐川から歸りに伊野町に寄つた桂月翁と私とは、吾川郡長、伊野町長、川内村長をはじめ、學校教員青年有志に迎へられて、大内温泉と云ふ温泉場に行つて、其所の料理屋にのほつた。酒間

に滑稽な桂月翁の似顔を書く者があつた。桂月翁はそれに句を題してやつた。この團隊では、毎年五月二十九日に桂月會をやると云つた。(五月二十九日)

○ 六月一日になつて私は一人歸京した。桂月翁はその十七日まで土佐に残つて、まだ悪酒に浸つてゐた。

Faint, illegible text on the right page, likely bleed-through or very light print.

吉野山中の魔神

Faint, illegible text on the left page, likely bleed-through or very light print.

正平年間、吉野の山門に南朝の朝廷があつた時の事である。その頃、南帝に奉侍してゐた臣下の中に、吉田中納言宗房と云ふ公卿があつたが、その宗房は、北方の姪きよひこに當る明子と云ふのを養女にしてゐた。

ある秋の晴れた日、明子は心願の事があつて、初瀬へ參詣に行つて來た。明子は輿に乗つてゐた。輿に添うて二人の女房と三人の青侍とが供をしてゐた。

吉野の入口まで歸つた所で、秋の野を染めてゐた陽が薄れかけた。何處からか鼠色の空が出て來て、それがみるみる空に擴がつた。輿かこ丁は疲れた足を早めて、山坂を登つて行つた。紅葉をした櫻の葉がばらばらと落ちた。

山が黒み渡つて、冷たい風が出た。今にも時雨が降りさうになつた。坂の中程まで行つた所で、不意に四方が暗くなつて黄昏のやうになつた。女房達は氣味悪い天氣模様あまに恐れをなして顔の色を變へてゐた。

薄赤い電光がきらきらと光つた。と、青侍の眼に白い一團の霧が輿の上うにふうわりとかゝつてゐるのが見えた。それと共に輿がびつたり止まつた。

「あ、」

明子の叫ぶ聲がした。雷光が又光つた。青侍は刀を抜いた。輿の垂れが千断れ飛んで、明子の體が輿の外へ浮いて出たが、直ぐ消えてしまつた。白い霧が其所にあつた。女房は腰を抜かして倒れ、輿丁は輿を投り出して逃げ走つた。

青侍は白い霧を目がけて切りかけた。一人の侍の刀は半分に折れて飛び散り、一人の侍の刀は繩のやうに絢れてしまつた。二人は氣を失つて倒れた。雷光が白い霧から出た。白い霧は急に引締つて朦朧と怪しい物の姿になつた。明子の青い裳がちらと見えた。

残つた一人の青侍は、その物の姿に迫まつて行つた。電光が又物の姿の中から出た。その拍子に青侍は魔神の口のやうな物を見た。青侍は恐れずに切り込んだ。

物の姿は又霧となつて上の方に流れ去らうとした。青侍は魔神を逃がすまいとした。小石が飛んで來て青侍の額に當つた。青侍は眼が眩んで倒れた。その青侍は、室生の光成と云ふ壯者であつた。

山門の警備に任じてゐた南朝の軍士は、輿丁の口から變を聞いて駆けつけた。明子の女房や青

侍はその軍士の手で介抱せられた。

光成は半身を起した。その顔は血に染まつて物凄かつた。二人の軍士はその肩に手をやつてゐた。軍士は光成を肩にかけて行く積りであつた。

「おいて下され、私は確じゃ、」

と、光成は忌忌しい物でも拂ひ除けるやうに、背後に立つてゐる二人の軍士を振返るやうにして、四方をぢつと見廻はした。夕陽の射した中に澤山の軍士がざわめいてゐた。

「明子様はどうしたと云ふのじゃ、」

と、詰問するやうに聞く者があつた。それは光成の前に立つてゐた侍大將であつた。光成はその顔を睨むやうに見上げた。

「變化の爲めにさらはれたのじゃ、輿が此所まで来ると、急に電光がして、奇怪な白雲が落ちかゝつて来て、輿の垂れを千断つて、姫を掴み出して逃げたのじゃ、」

「その方は、どうして手傷を受けたのじゃ、」
と侍大將が聞いた。

「變化を仕留めやうと切り込んだ爲めに、變化からついでを打たれて、この始末じゃ、」
と云つて、光成は起ちあがつて、

「これから姫を取り返して来る、それまでは殿の見参に入らないから、後を頼む、」

光成はかう云つて落ちてゐた刀を拾つて鞘に收め、靜に山をくだつて行つた。

光成は室生の生れであつた。彼は一先づ室生へ歸つて、其所で糧食などの用意をし、吉野山を奥へ奥へと這入つて、魔神のゐさうな所を探して歩いた。

谷を渡り、峰を攀ちて、非常な艱難と戦つたが、彼はそれをなんとも思はなかつた。彼は一日も早く明子を取り返して、中納言の許に歸つて行きたかつた。明子を生みの子以上に可愛がつてゐる中納言夫婦の涙を思ふと、彼はたまらなく魔神が悪くかつた。彼は變幻自在な魔神の爲めに己の生命を失ふと云ふ危険などは考へてゐなかつた。

山の中に二十日あまりの日が経つた。彼は伊勢境になつた大臺ヶ原山を登つてゐた。もう秋も老けてゐた。彼はその先夜を麓の巖の蔭に明かして、腰につけた縮ちぢを喫ひ、巖穴に溜つた清水を

飲むと、出たばかりの朝陽を木立の梢に仰ぎながら、頂上へと向つて出發した。樵夫の通つた跡らしい小徑が荆棘の中にあつた。

午さがりになつて、瀧のかゝつてゐる所へ出た。瀧は三段になつて凄しく落ちてゐた。眞紅に紅葉した楓が瀧の兩側にあつた。小徑は其所で無くなつてゐた。光成は瀧壺へおりて行つて、瀧波のかゝつてゐる岩を傳うて向へ渡つた。と、又小徑らしい物があつた。彼はそれを辿つて、小さな山の背を越ゑた。

懐になつた谷が来て、大きな巖が木立の間から頭を出してゐた。寺のやうな建物の屋根も一つあつた。光成は寺があるなら、寺僧に逢つて、この山に魔神が住むか住まないかを確かめたいと思つた。彼はその方へと行つた。

木立は斑になつて、足に絡みつく荆棘も深くはなかつた。大きな巖の屏風のやうに立つてゐる傍を廻はると、門の頽れた荒廢した寺があつた。光成は一眼見て無住の寺であると思つた。と、何處からともなく琴を奏でる音がした。彼は耳をそばたてた。續いて女の笑ふ聲が聞えて來た。彼は不審でたまらなかつた。さうして彼は、破戒僧が世間との交渉がないまゝに、女を蓄へてゐる

るではないか、と思つた。彼は頽れた門を這入つて、先づ左手に見える厨らしい小屋根のある方へと曲つて行つた。脂濃い物の匂が漂うて來た。

丹の剥けた佛像の首の落ちたのや、障子の骨や、經机の足の取れたのや、箱の碎けたのや、それは種々の物を積み重ねた傍を通つて、厨の口の方に行くと、女の話聲がしてゐる。光成はその女達を驚かさないうやうにと、靜に歩いて行つた。

厨の土間には、三人の綺麗な女が御馳走の構へをしてゐた。一人は赤い獸の肉を切つてをり、その一人は釜の下を焼き、その一人は鍋で煮た肉塊を大井にしゃくひあけてゐた。獸の肉を切つてゐた女が光成を見付けた。その女はびつくりしたやうな眼で光成を見詰めたが、直ぐ何もかも分つたと云ふやうにして、持つてゐた小刀を置いて、光成を手招きした。光成は何か事情があるだらうと思つて、躊躇はずに土間へ這入つて行つた。琴の音は未だ聞えてゐた。それは本堂から來るらしかつた。物を煮てゐた二人の女も、光成を見付けた。

『お前さんは、何處から來た。』

と、肉を切つてゐた女が聞いた。

「私は心願があつて、山から山へかけて、神様や佛様を拜んで廻つてをる者じや、」
と、光成は答へた。

「お前さんは何も知らんが、此所には恐ろし者が住んでをつて、どんなに強い者でも掴み殺される。私達もそれにさらはれて来て、その機嫌を取つてをる者じやが、何時機嫌を損なうて殺されるかも分らん、お前さんは早う逃げなざるが好い。」

と、女は四方に注意しながら云つた。光成はそれを聞くと、さへはと思つた。彼の血は燃えた。

「そんなら一つ尋ねたいが、今日から二十日位前に、その恐ろしい奴にさらはれて来た若い女子はあるまいか、」

「ある、ある、綺麗な上つ方の御娘子、」

「星のやうな眼をした姫君じや、」

「吉田中納言とか云ふじやろがの、」

「さうじや、吉田中納言の姫君じや、何處にをる、早う逢はしてくれ、」

「その姫君は昨日から心持がすぐれぬと云うて、奥に寝てじやが、奥へ這入つてをるやうものなら恐しい奴が歸つて来て、掴み殺される、諦めて早う歸るが好い。」

「殺されても大事ない、姫君のお供をして、初瀬詣をしての戻りに、山門の下でさらはれたからそれを取り返しに来た所じや、その恐ろしい奴とは何者じや、」

「見た所は、綺麗な和尚さんじやが、飛行自在で、欲しいと思つた者は、女子でも食物でもなんでも持つてくる、平生は女子にも優しうて、萬遍なく皆を可愛がるが、機嫌を損ねた者とか、病身になつた者とは、何時の間にかをらんやうになる、軍士が何百人で切りかけても、とても勝てる者でない、姫君はいとしからうが、とても叶はんから諦めるが好い、私等じやとて、在所には親もあり兄弟もあり、所夫もある、」

「どうかして、その和尚を刺す殺す工風はないかなア、」

と、光成は歎息するやうに云つた。

「藤枝さん、」

と云つて、大井に肉塊をしやくふてゐた女が、井を鍋の傍におろしてから、肉を切つてゐた女

の傍へ寄り、耳に口をつけて話し出した。光成は刀の柄を見ながら耳を澄ましてゐた。琴の音はまだ聞えてゐた。

女同志の囁きはすんだ。肉を切つてゐた女は、光成の顔を見て、片手をあけて招いた。光成はびつたりその女の傍に寄つた。女は光成の耳に口をつけて囁いた。

『本當にお前さんが、生命を捨てても和尚さんを殺す決心があるなら、好い事が一つある。和尚さんが酒に酔ふと、私達の結んでゐる紐を、十筋位合はさして、手足を縛らし、それを一度に切つて楽しみにする事がある、若し、お前さんが、その時殺すと云ふなら、紐の中へ麻繩を縫ひ込んで置いて、切れないやうにして置いて殺すが好い。』

光成は悦んだ。

『どうか力をかして下さい。』

『それでは、いくら苦しくても、私が呼ぶまでこの厨の床の下に隠れてゐて下さい、食物は私が夜々入れてあげる、此所は厨で、物の香があるから、隠れてゐても分らんが、若し、戸外へ出てゐるが最後、和尚さんに嗅ぎ出されて殺される。』

『いや、もう、お前さんが呼んでくれるまで、何日でも隠れてゐる。』

『それでは早う隠れるが好い。』

と、女床の下の方に眼をやつた。光成は刀を鞘ぐるみ除つて、手に持ち、土間へ身を屈めてそれから床の下へと這入つて行つた。

陽が入つて暗みかけた所で方丈の庭前へひらひらと一團の雲が飛んで來た。と、一人の和尚が庭に姿をあらはして咳をした。方丈の中は急にざわめき出して、十五六人の綺麗に著飾つた女が縁側に出て立つた。

和尚は莞爾々々とした顔をして、ひとわたり女の方を見た後に、ひらりと縁側にあがつて、女達に取り巻かれながら内へ這入つた。室の中には燈火がうつすらと點いて、肉を盛つた井鉢を置いてあつた。

和尚はその肉を前にして坐つた。顔の赤い、眼の茶色に光る男であつた。女は和尚の右にも左にも、それから前にも坐つてゐた。和尚はもう女の出した大きな盃に手をやつて、酒を飲み出し

た。肉は手づかみにしてべろべろと喫つた。

和尚の赤い顔は次第に赤くなつて来た。どの女もどの女も和尚にあらん限りの媚を呈した。和尚は左右にをる女の肩に手をかけた。女は和尚に體を投げかけた。一人の女は扇を閃かして、向ふの方で舞ひはじめた。舞に合はして一人の女が今様を歌つた。

和尚は時々ヒヒヒと耳に立つ聲を出して笑つた。酌をしてゐた女は、和尚の盃を下に置かせまゝとした。和尚は左側にゐた女を抱へるやうにして室を出て行つた。和尚が酒の間に女を伴れて室を出て行くのは、毎晩の事であるから、誰も怪しまなかつた。和尚がなくなると、女達はひつそりとして顔を見合はしてゐた。

間もなく和尚は、伴れて出て行つた女に手を引かれて暗い所から出て来た。女は又和尚を取り巻いて騒ぎ出した。和尚は又酒を飲み、肉を手づかみで喫ひ出した。今度は二人の女が舞ひ出した。長い赤い袂がひらひらと蝶のやうに靡いた。和尚は盃を持つたなりにその方を見詰めてゐたが、舞が終るとその一人を招いた。招かれた女は和尚の傍へ寄つて来た。和尚はそれを膝へ抱きあけるやうにしてゐたが、又その女の手を取つて室の外へと出て行つた。

女達は又鳴りを静めて顔を見合はしてゐた。和尚は莞爾々々しながら又出て来た。女達のざわめきは又はじまつた。琴を持ち出して来て引く者があつた。一人は横笛を持つて来て、琴に合せて吹き出した。和尚は又笛を吹いてゐた女を連れて室の外へと出たが、今度這入つて来ると、何か云ひながら左右の両手をうんと前に出した。女はざわめいて、皆めいめに締めてゐる腰紐を解きかけた。和尚はヒヒヒと得意さうに笑つて、突き出して両手をびつたり合はせた。

厨の床下に隠れてゐた光成は、三日目の夜になつて、周章しい女の聲に呼ばれて、刀を手にして這ひ出した。

『さ、縛つてあるから、私と一所に来て下され。』

光成を床の下へ隠した女が来て手招きをしてゐる。光成は刀の柄に手をかけながら、女の後から這いて行つた。暗い廊下を通つて行くと、何者か怒り罵つてゐる室へ行つた。光成は刀をきりと抜いて、その室へ飛び込んだ。

手足を綺麗な紐で十重二十重に縛られた和尚が、仰向になつたまゝで、手足を悶搔いて吼え猛

つてゐた。女達は室の隅に一團になつて顔に袖屏風をして縮んでゐた。光成は飛んで行つて、袴の胸元を一突きにと突いた。と、刀がつるりと滑つて切れなかつた。光成は今度は咽喉元を目がけて突いた。今度はづぶりと這入つた。

魔神の正體は老猿であつた。

光成は妖精に浸されて病氣になつてゐた明子姫を伴ひ、その他の女達を連れて一所に山をくだり、女達はそれぞれ親許や所夫の手に返し、自分達二人は、吉野の山門へと返つて行つた。

光成は後に侍大將となつたが、その妻には明子姫がなつてゐた。

松魚のたき

●銅像

代々山内家の居城であつた高知公園の大手門の外には、藩祖山内一豊公を祀つた藤並神社と云ふ縣社があるが、大正二年になつて、藩の舊臣によつて、その祠前に公の銅像が建設せられた。

銅像の製作者は、本山白雲氏である。その銅像が鑄造せられたばかりで、未だ小石川にある同氏の庭前に置いてあつた時のことである。矢張りその近くの林町に住んでゐる某氏が或る日、その前を通りかゝつて、銅像を見てゐると、後から二三人の少年が來たが、その一人は銅像に指をさして、『おかみさんに馬を買つて貰つたんだ。』と云つたので、大に考へさせられたと云つて、私に話した事があつた。

山内公は謹厚温和の長者である。口さがない京童の言は非禮の甚しいものであるが、併し銅像の風教に及ぼす影響の如何をも考へないで、豚屋の爺親のでも、賭博の親方のでも、差別なしに建設しようとする者などは、大に考へべき言であらうと思ふ。

●浦戸の城趾

先年、土佐に歸つて浦戸の城址に登つた。浦戸城は長曾我部元親の居城で、入江の西岸を廻つ

た山脈が南に崩れて、龍頭岬にならうとした所に聳え立つた浦戸山の上にある。黒松や雜木のまじつた一むらの茂りが頂上に見えて、其所が浦戸城の天守の在つた所だと云つて、城八幡と云ふ小さな八幡宮の祠がある。祠と並んで氣象信號臺の白ペンキ塗の臺があつて、信號の旗が初夏の風に動いてゐた。

長曾我部元親は、土佐が生んだ唯一の英雄である。岡豊山三千貫の領主から起つて、一度は四國を統御した事もある。若し土佐がその子弟の爲めに、土佐魂を象徴させるの企をするならば、元親の銅像を建設せねばならぬ。そして建設の場所は、この浦戸山の城址でなければならぬ。

●松魚のたき

土佐で酒徒の珍重するものは、松魚のたきである。薬のやうなほうと一度に燃えあがる軽い火で、ばら／＼と鹽をふつた松魚の肉の裏表を薄すらと焼き、それを刺身のやうに厚く切つて、酢や醬油をつけて喫ふものである。この料理は、土佐獨特の料理のやうに思つてゐる人もあるが、磯節で有名な大洗でも、紀州あたりでも喫はすらしい。或る先輩の考證では、これは土佐へ松魚節の製法など、紀州に行つた紀州あたりの人が傳へたものらしいとの事であるが、それが事實か

も分らない。

私は元年土佐へ歸つて、このたゞきを厭と云ふほど喫はされて閉口した。

● 松魚の料理

日和下駄の齒のやうに厚く切つた松魚の刺身に大蒜てんかくをつけて喫ふのも、土佐の酒徒の悦ぶ所であるが、糠と酒粕とで拵へた味噌で松魚のあらを煮たのは、土佐獨特の料理として、天下の酒徒を悦ばすに足る物がある。田岡嶺雲先生が病中に「味噌で松魚のあらを煮て喫ひたい、君とこの細君は味噌を拵へる事は出来ないかね」と云つたけれども、妻がそれを知らなかつたので、終に嶺雲先生の願ひを叶へてやる事が出来なかつた。私は土佐へ歸つて、その馳走を受けるたびに嶺雲先生の事を思ひ出す。

● 俗 語

土佐のお國語にヨサコイ節と云ふものがあつて、その中に語はれるもので、「私の情人じやういんさんは浦戸の沖で、雨にしよんほり濡れて松魚釣る」と云ふ俗語があるが、松魚國の情景を盡して餘蘊のないものだ。

● にろぎ釣り

高知市をはじめ、浦戸港の入江に沿ふた所では、夏の末から冬のはじめにかけて、にろぎ釣の戀みがある。銀色をして、木の葉のやうな扁平な魚で、それを釣るには、鉛の分銅の左右に針金の手をやつて、その手の先のでぐすと鉤をつけ、それを長い糸の端につけたものを用ゐる。餌は海老でも、いかでも蚯蚓でも好い。桂月翁の隨筆の中にも、にろぎ釣りに關する一節がある。「にろぎは扁平なる魚にて、味太だよし。この魚、我が郷里の海に多く、にろぎ釣りと云へば、我が郷里のおもなる戀みの一つ也。われ此魚の味を口にせざること二十年。十歳の時、父の妾、歸省しけるとき、われも伴はれ行きて、其家の門前より舟に乗りて、共に此魚を釣りしことありき。無暗にくひ付く魚にて、一時間ならぬに數十尾を得たりしことは、今もなほ忘るゝ能はず、これ余が最初のにろぎ釣りなると共に、また最終のにろぎ釣りなりき。」

にろぎ釣りに行くには、小舟を乗つて行く者もあれば、まつたく遊山の構へで、船頭付の屋根船に乗つて行く者がある。舟の中には辨當の他に、釣つたにろぎを料理して食べる爲に小鍋と混爐とを用意してゐたりする。そして集つて來て釣舟は、思ひ思ひに銚をおろして、筏を組んだやうに舟縁を並べ、それから鉛の分銅の付いた釣道具を潮の中に入れて、その分銅が海底に届いたと

思ふと、二三尺位糸を上につりあけて、時々それを動かしながら、魚の来るのを待つのである。潮合の好い時には、釣道具をさける間もなく魚がかゝる上に、左右の鉤にもかゝつて来るので、桂月翁の書いてあるやうに、一時間位の間には、二三十尾も釣れる事がある。

入江の中には、棧島、巢山などいふ小島が浮んでゐるが、棧島は黒松の二三本生へた岩山で、巢山は緑樹に被はれて棧島から見れば数十倍の大きさのある島山である。巢山へは夕方になるとその附近の鳥が皆集まつて来た。私は小舟をその島蔭に寄せて、蚯蚓を掘つたり、木蔭で晝寝をしたものだ。魚が釣れる空の暑い時には、潮の中に潜り込んで泳ぎもした。

入江の西北には、鷲尾、荒倉など云ふ可成り高い山が聳えてゐる。冬の初、餘念なく釣をしてゐると、鷲尾の空あたりに青鼠の色をした雲がふと現はれる。と、今まで鏡の面のやうであつた海面が黒み立つて来て、恐ろしい西風が止め途のない怒りに狂ふやうに吹き荒れる。小舟は恐れて蜘蛛の子を散らすやうに漕ぎ返つて行くが、陽が落ちると、今まで狂つてゐた風はぱつたり風いで、海の面に微笑が見え、夕映した西の空に、巢山に歸つて来る鳥の黒い影を畫のやうに七つ五つと印してゐた。

● 小魚釣り

にろぎ釣りに限らず魚釣りは面白いものだ。海岸に生れた私の少年期は、その魚釣りにすぎたと云つても好い位に魚釣りをやつたものだ。

魚釣りにも種々あつた。田圃の用水池へ行つて鮒を釣つたり、鰻を釣つたり、入江へ行つては沙魚やかいづなどを釣つたりしたが、面白かつたのは、土佐灣の磯で波をかついで小魚を釣つた事であつた。

小學校から歸つて來ると、暑いのに笠も冠らず、小さな籠をもつて入江の干潟に行つて、餌にするがうな貝を拾ひ、それから一度家に歸つて、釣竿を持つて海岸に出る。其所で好い場所を選んで、小籠や釣竿と一所に持つて行つた石で、そのがうな貝を細かく砕く。これは蒔餌まき餌を拵へて魚を集める爲である。そして蒔餌が出來ると素裸體になつて、波の打つてゐる所に二度も三度も投げ込んでから、はじめて釣りにかゝるが、際涯のない海の果てから、後から後からと寄せて來る波が磯に崩れて、少年の體を捲き込まうと捲き込まうとするので、それに捲き込まれまいとするには、波頭をあちこちに代さなければならぬ。それでも代せないともみると、左の手を働かして波

頭の上に泳ぎあがつて行つて、崩れる波を背後にせねばならぬ。きす、ちぬご、すみひき、あぎなし、など云ふ小魚が釣れた。ふぐが来ると、鉤を噛み切つて行つた。時とすると大きなちぬ鯛が来て、鉤も糸も、うっかりしてると、竿ごと持つて行く事があつた。あぎなしを釣るには浮標をつけた竿で、鯛の餌をさして、地引網を引いた後の網を漏れた鯛の自然とまき餌になつた所などで釣つた。太平洋に土用波が立つて、潮霧が海岸の松並木にかゝる前後には、田圃から小蟹を捕へて来て、ちぬ鯛を釣る者もあつた。それはきり竿と云つて、長い竿に針金の乳が付いて、糸をその中を通して、遠くの方へ鉤をやる仕掛の竿であつた。餌にする蟹は、甲の柔らかい赤い蟹がよかつた。大きなちぬ鯛は、糸を切る恐れがあるので、鉤にかゝると、好く潮の中でなやして、それから引きあげた。

魚釣りが面白くなつて来ると、學校に行く氣はしなかつたが、それでも休むと叱られるから、授業の時間に學校を抜け出して行つて、がうな貝を拾つて置いて、その日の授業の終るのを待ちかねて家に歸り、學校の道具は庭先から家の内へ投げ込んで置いて、海岸に走つた。釣好きは生徒ばかりでなかつた、池の藻の中に住んでゐる銚を持った鼠色の大きな海老を生徒に持つて来て

貰ひ、授業がすむと急いで家に歸つて、小舟でさす釣りに行く先生もあつた。その釣好きの先生は、末に壯健で、好きな釣りをやつてゐると聞いたが、暇がなかつたので、訪ふ事が出来なかつたのは、残念なことであつた。

● 造船熱

私の村は浦戸港の入江を控へて、造船に便利が好いと云ふ所から、舊藩時代には藩の船倉が置かれて、大小の和船が造られたが、維新後も引續いて造船の場所となり、最近になつても五六所にある造船所では、西洋型の帆船が造られてゐた。それが今回歐洲戦亂の影響で、船舶に大不足を來たすと共に、船價が暴騰して、續々と木造汽船の注文が来る上に、其所からも此所からも船成金の噂が傳へられたので、之を見た附近の人々は、我も我もと造船に眼を著した結果、入江に沿ふた村々の畑地は、數瞬く間に皆俄構への造船所となつた。其所には木材の山が積まれ、長いキールが据ゑられるなど、鋤や手斧の音が入江の潮に響き、小山に反響をかへしてゐたが、意地の悪い監船令が出た爲に、氣勢が一變して、もとからやつてゐる手堅い造船所を除いては、資金の出所がなくなつたり、手付け流れになつたりして、大半の造船は中止になつた。今年私が故郷へ

歸つて時に見ると、スマントを建てかけたり、ボイデンを付けかけたりした汽船の木材が、雨に黒くなつて、入江の岸の麥の黄いろに熟した畑の中に立つてゐるのが、其所にも此所にもあつた。俄造船家の中でも、幸に資金の融通の付いた者は、船を仕上げる事は仕上げたが、買ひ手がなないので困つてゐる者もあつた。私の友人もその一人であつた。私の友人は私が上京する時、神戸まで一所に汽船に乗つたが、その手荷物の中には、大きな二枚の寫眞を持つてゐた。それは製作船の寫眞で、大阪へその船を賣りに行く所であつた。

●船 大 工

私の叔父も古くから造船業をやつてゐる。腕一本で可成りの富を作つただけに、勢力の權化とも云ふべき人だ。三十前後から頭が赤黒くつるりと禿けて、大きな藥罐頭をしてゐるが、決して帽子を冠らない。作事船を陸に揚げたりする時には、素裸體になつて潮の中に這入つて、その頭を暑い焼けるやうな陽に晒しながら人夫や大工の指揮をした。

私も少年の時、この叔父の許で、三四年船大工をやつた事があるが、仕事が苦しいので、毎日晚の仕事終を待ちかねたものだ。鋸を持つて厭々スマントにする材木を引いてゐると、傍で仕事

をしてゐる大工達が、思ひ出したやうに口を揃へて、「思ひ暮らしの入相の鐘が、鳴るぞ嬉しや寺々で、」と云つて歌つた。

●闘 犬

闘犬は土佐特有の遊戯で犬寄と云つてゐる。今はすこし違つてゐるかも知れないが、私たちが見物に行く頃には、土俵のやうな物を築いて、その周圍に柵を建て、その左右に付いた門口から犬を入れた。小牛のやうな大きな犬は、敵の姿をみると猛り吼えて、突然飛びかゝらうとするので、飼主はそれをぐつと押へ付けながら、機を見て首繩を解く。犬は狂ひかかつて、敵の口元、耳、咽喉元、胸、足の見さかひなく噛みつく。弱いのは悲鳴をあげて逃げる。耳がちぎれ、足の骨が碎けても悲鳴をあげない犬もある。血は犬の毛並を物凄く染める。

一三人の行司と、双方の飼主は、柵の上をぐるぐる歩いたり、柵の内に這入つたりして、耳を濟まして犬の悲鳴をあけるのを聞いてゐる。双方の犬の最負も柵の周圍に集つて鳴聲を聞いてゐる。行司が聞き違へて、鳴かない方を鳴いたとでも云ふものなら、それこそことだ。

「鳴いた。」

『鳴かん。』

『いや鳴いた。』と争つた揚句が、犬をそつちのけにして、飼主や最負の者が入れ亂れて喧嘩した。見物人も氣の荒い手合ばかりだ。闘ひの順番を待つてゐる數十疋の犬は、其所でも此所でも、わん、わん、ぎゃん、ぎゃん、と吠へ狂つて、四方を殺氣立たしてゐる。

私の知人の家にも闘犬を飼つたあつたので、犬寄せに行く日には、最負の者が集つて来て、酒を飲んで景氣をつけ、犬の名乗りを書いた小さな旗を持つたり、布片で縛ふた綱を五筋も六筋も犬の首輪につけて牽いて行つた。そして犬が勝つと、歸つて来て祝ひの酒を飲んだ。若し負ける事があつても酒は呑むには呑んだが、そんな時には、『こんなかめ犬は、下駄の緒にするぞ、』と、罵り罵りして盃をあけたものだ。

●幸治の細君

先年私が故郷へ歸つて、二日目か三日目の時であつた。村の通りを歩いて居ると、入江の方からだら／＼と高まつた小路を、黒魚子の羽織を着て、袴を履いた若い男が上つて來た。後にも二人ばかり續いて居る。

私は一目見て、その若い男は、自分が小學校で教へた事のある幸治といふ男であると知つた。畑に行き、地曳網を引く農家の俵が羽織を着、袴を履いて居るのは、婚入の外にないと思つた。で、歸つて母にその話をする、確に今晚嫁が來ると云つた。ものを言ふ時に少し齒を出す癖のある内氣な子供が、早や嫁をとるやうになつたかと驚いた。

私の村では、結婚の日、婚の方で、酒と肴を持つて、女の家へ婚入りする事になつて居る。そして婚の往來の途ではお祝だと云つて、婚に水をかける風習がある。それで婚によると、晴着は女の家で着更るやうにして行くものもあつた。私が小さな時、北の村から私の家の近くへ婚入があつた。それを土地の若衆が路の上の桑畑の中にかくて居て、うっかり通りかゝつた婚の頭の上から手桶の水を倒さまにしておびせかけた。その時は秋で、桑の葉が黄ろくなつて居た。晴着をだいなしにせられた婚は、大恐慌を來すと共に怒り出して、相手の若衆を桑畑から引ずり下ろした。幸治君も今日、水をかけられはしなかつたかと思つた。

その夕方、寝ころんで煙草をふかしてゐると、隣家の男が半紙を三枚ばかり持つて、裏口からのつそり這入つて來た。『今日、酒を釣りに行くきに、書いてくれんか、』

婚禮のある家へ、簀を着たり、頼冠をしたりした村の人が、貧乏徳利や笈を持って酒肴を貰ひに行く習慣がある。中には長い竹につけた徳利や小笈を塀の外から、式がすんで親類や隣家の人を馳走して居る座敷へ出すものもある。その中には、目出度いといふ意味の狂歌のやうなものが添へてある。酒と肴とは、やがてその器に詰められる。——私は怪しい狂歌を書いて遣つた。

夜になつて父と酒を飲んでをると、遠の方で『嫁ぢやア、嫁ぢやア、』と云つて騒ぐ聲がした。幸治君の家へ嫁入道具がついたらしい。酒のあとで飯にして、それがすんだ所で、通りを女や子供が走り出した。『行かんけよ、』と云つて通りを距て、聲をかけ合ふ女もあつた。

嫁の一行が着いたので婚禮の式を見に行く所である。嘗て幸治君の兄になる人が婚禮をした晩、村の者が大勢表座敷の庭先へつめかけて、花嫁と花婿との盃のやりとりを見てゐる時、子供がわい／＼云つて騒いだので、どうしてもチョン鬨をきらない幸七と云ふ幸治君の父親が出て来て、『これでも山田屋の幸七の家だが、お前らア私の家をわやにする積か、』と云つて屹となつたので、塀の上へかきあがつたり、庭の植木にのほつたりして騒いでゐた子供等は、恐れてビツタリ静まつた。私はその事を思ひ出した。『又幸七さんが怒りはせんかな、』

村ではそれが評番になつて居たので、父も覺えて居た。『左様ぢや左様ぢや、』と云つて、酔つて赤くなつた顔に笑つた。

それから二日ばかりして、私は隣村へ行くつもりで、入江の岸に立つて、巡行船の來るのを待つて居た。二時頃の春の入江はとろりとして、一團の白い雲が前峯につらなつた小山の上に垂れて居た。私の立つて居る海岸の石段の上には、切符を賣る小屋があつて、涼臺を一つ構へてあつた。その角には小さな榎があつて、それから船板でした棧橋に下りるやうになつて居る。私が涼臺に腰をかけて居ると、十八九ばかりの盛装をした小柄な女と、お婆さんが後から來た。若い女は暖な日を洋傘にさけて榎と並んで立つた。それが幸治君の妻君の里歸をする所であつた。其所へ巡行船が西の方から來た。その船に乗つて北の岬と岬とが突き出て門口になつたやうな所を曲ると、××市の人家が見える。二人の女はその船に乗つた。私はその時××市の方から來た船に乗つて、西の方に行つた。

● 俳 句

土佐へ歸つてゐる間に、惡句を作つた。中には無理に作らされた物もあつた。

三の糸切れて春行く夕かな
夏の月枝豆の味淡はかりき
横倉に雨雲重き五月かな
城址の楊梅青き恨みかな
行々子啼くや小雨の市の中



□ 附奥語綺宵春 □

大正九年三月一日印刷
大正九年四月二十二日發行

定價金一圓七十錢

著作權
所有



發行所

著者	田中貢太郎
發行者	東京市神田區南神保町三番地 日新聞代表者 足立四郎吉
印刷者	東京市京橋區築地二丁目三十番地 川崎佐吉
印刷所	東京市京橋區築地二丁目三十番地 川崎活版所

東京市神田區南神保町三番地
株式會社
日新閣
電話本局二九九一
接替東京一一三九二番

外1847
た

◎ 株式會社 日新閣新刊書目 ◎

- | | | | | | | | | | | |
|---|--|---|---|---|---|---|---|--|---|---|
| <p>◎ 佐藤鐵太郎中將述 ◎ 久遠の生命 ◎
 定價金壹圓五拾錢
 送料金拾貳錢</p> | <p>◎ 釋宗演禪師著 ◎ 快人快馬 ◎
 定價金壹圓參拾錢
 送料金拾貳錢</p> | <p>◎ 菅原時保禪師著 ◎ 電光石火 ◎
 定價金壹圓五拾錢
 送料金拾貳錢</p> | <p>◎ 竹田默雷禪師著 ◎ 大機大用 ◎
 定價金壹圓參拾錢
 送料金拾貳錢</p> | <p>◎ 岸上鎌吉先生著 ◎ 趣味の魚 ◎
 定價金壹圓
 送料金八錢</p> | <p>◎ 大泉黑石氏著 ◎ 闇を行く人 ◎
 定價金壹圓七拾錢
 送料金拾貳錢</p> | <p>◎ 田中貢太郎氏著 ◎ 奇話哀話 ◎
 定價金壹圓五拾錢
 送料金拾貳錢</p> | <p>◎ 生方敏郎氏著 ◎ 悲しい笑ひ ◎
 定價金壹圓七拾錢
 送料金拾貳錢</p> | <p>◎ 村松梢風氏著 ◎ 燈影綺談 ◎
 定價金壹圓七拾錢
 送料金拾貳錢</p> | <p>◎ 法學博士 平沼淑郎先生著 ◎ 社會及組織の研究 ◎
 定價金貳圓
 送料金拾貳錢</p> | <p>◎ 大町桂月先生著 ◎ 少年日本百傑 ◎
 各冊金壹圓五拾錢
 送料金拾貳錢</p> |
|---|--|---|---|---|---|---|---|--|---|---|

391
127

F13
TA843
2

終

